

平成18年度
「評議員会」報告書

平成19年3月

福井工業高等専門学校

まえがき

平成16年4月をもって従来の国立高等専門学校は独立行政法人「国立高等専門学校機構」となり、本校も一昨年、創立40周年を済ませて次の40年に向けての新しい一歩を踏み出した。国立高等教育機関は、国民の税金で運営されている以上、各機関の運営状況を外部に公開し、その内容を国民に積極的に説明する責任（Accountability）が科せられている。本校は、日本技術者教育認定機構（JABEE）により、教育カリキュラムが認定されているJABEE認定校であるが、さらに、一昨年、「大学評価・学位授与機構」による認証評価を受審し、改善を要する点はないとの高い評価を受けた。

本校の中期計画では、学外有識者により構成される評議員会を設置し、毎年、教育及び研究に関する外部評価を受けるとともに、学校運営に関する意見を聴取すると謳っており、その趣旨に添って平成19年2月2日に平成18年度第3回評議員会を開催した。本校では「福井高専教育点検システム」として、学習・教育目標、教育方法、教育環境、学習保証時間、教育達成度に、計画（Plan）、実施・運用（Do）、点検・検証（Check）、見直し・改善（Action）のいわゆるPDCAサイクルを常時稼働させており、評議員会はこの中で点検・検証の重要な機能を果たすものである。

平成18年度第3回評議員会では、昨年度の評議員会でご指摘いただいた、科研費に対する取り組み、丹南地区に密着した高専、大学進学を希望する受験生への取り組み、工学基礎コースのその後の進展、地場産業への就職者増を図る方策等について、その後の本校の取り組みを校長、副校長、担当主事が行った後、教育・研究環境の視察をお願いし、討論、提言、講評を頂いた。本校では、これらの評議員各位からのご意見を生かして、法人化の目標とされる福井高専の個性化、活性化、高度化を図り、世の中で必要とされる福井高専を目指してより一層の努力を積み重ねる覚悟である。最後にあたって、評議員各位の本校に対するご協力に深甚の謝意を表するものである。

福井工業高等専門学校長

駒井謙治郎

目 次

まえがき

I. 福井工業高等専門学校評議員会規則	1
II. 評議員会委員名簿	2
III. 評議員会日程	3
IV. 本校出席者名簿	4
V. 評価体制	6
VI. 議 事	1 4
VII. 参考資料	3 5

I. 福井工業高等専門学校評議員会規則

平成16年5月13日規則第21号
改正 平成16年 6月 3日規則第23号
平成19年 2月 1日規則第 1号

(設置)

第1条 福井工業高等専門学校（以下「本校」という。）に、広く学外有識者の意見を聴くための組織として、福井工業高等専門学校評議員会（以下「評議員会」という。）を置く。

(任務)

第2条 評議員会は、本校の教育研究目標・計画、自己評価、その他本校の運営に関する重要事項について、校長の諮問に応じて審議・評価し、及び校長に対して助言又は勧告を行う。

(組織)

第3条 評議員会は、10人以内の評議員で組織する。

2 評議員は、本校教職員以外の者で高等専門学校に関し広くかつ高い識見を有する者のうちから校長が委嘱する。

3 評議員の任期は、1年とし、再任を妨げない。ただし、評議員に欠員が生じた場合の後任の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第4条 評議員会の議長は、評議員の互選により定める。

(評議員会の開催)

第5条 評議員会は、校長が招集する。

2 評議員会は、年1回以上開催するものとする。

3 評議員会は、必要に応じて関係者の出席を求め、その意見を聴くことができる。

(守秘義務)

第6条 評議員は、その役割を遂行するうえで知り得た情報を、正当な理由なく漏洩してはならない。

(庶務)

第7条 評議員会の庶務は、総務課が処理する。

附 則

この規則は、平成16年5月13日から施行する。

附 則（平成16年6月3日改正）

この規則は、平成16年6月3日から施行する。

附 則（平成19年2月1日改正）

この規則は、平成19年2月1日から施行し、平成18年10月1日から適用する。

II. 評議員会委員名簿

(高等教育機関の教員等及び経験者)

兄 嶋 真 平 福井大学長

(高等教育機関の教員等及び経験者)

小 島 陽 長岡技術科学大学長

(本校の所在する地域の教育関係者)

辻 崎 正 則 鯖江市中学校校長会会長
(中央中学校校長)

(地方自治体等研究機関の研究者等)

友 田 茂 福井県工業技術センター所長

(産業界の有識者)

野 村 一 榮 鯖江商工会議所会頭

(産業界の有識者)

本 島 正 勝 信越化学工業(株)磁性材料研究所長

(報道機関の有識者)

渡 辺 数 巳 (株)福井新聞社 論説委員長

Ⅲ. 評議員会日程

1. 日 時 平成19年2月2日(金) 13:30~16:50
2. 場 所 福井工業高等専門学校 メディアホール
3. 日 程
 - 13:30 【開 会】
校長挨拶, 出席者の紹介, 日程説明, 委員長選出
 - 13:45 【1. 本校の概要等】
 - (1) 高専の最近の状況等について 校 長
 - (2) 本校の概要について.....副校長(教務・学生・寮務主事, 専攻科長)
 - (3) 平成17年度第1回評議員会における教育・研究改善事項等について
..... 副校長(教務主事)
 - (4) 福井工業高等専門学校の中期計画進捗状況について
..... 副校長(教務主事)
 - 14:50 — 休 憩 —
 - 15:00 【2. 教育・研究環境視察】
ロボコン実演(夢づくり工房ドリームラボ)
 - 15:20 【3. 全体討論・提言】
 - 16:20 【4. 講 評】
 - 16:50 【閉 会】
校長謝辞

4. 提示資料

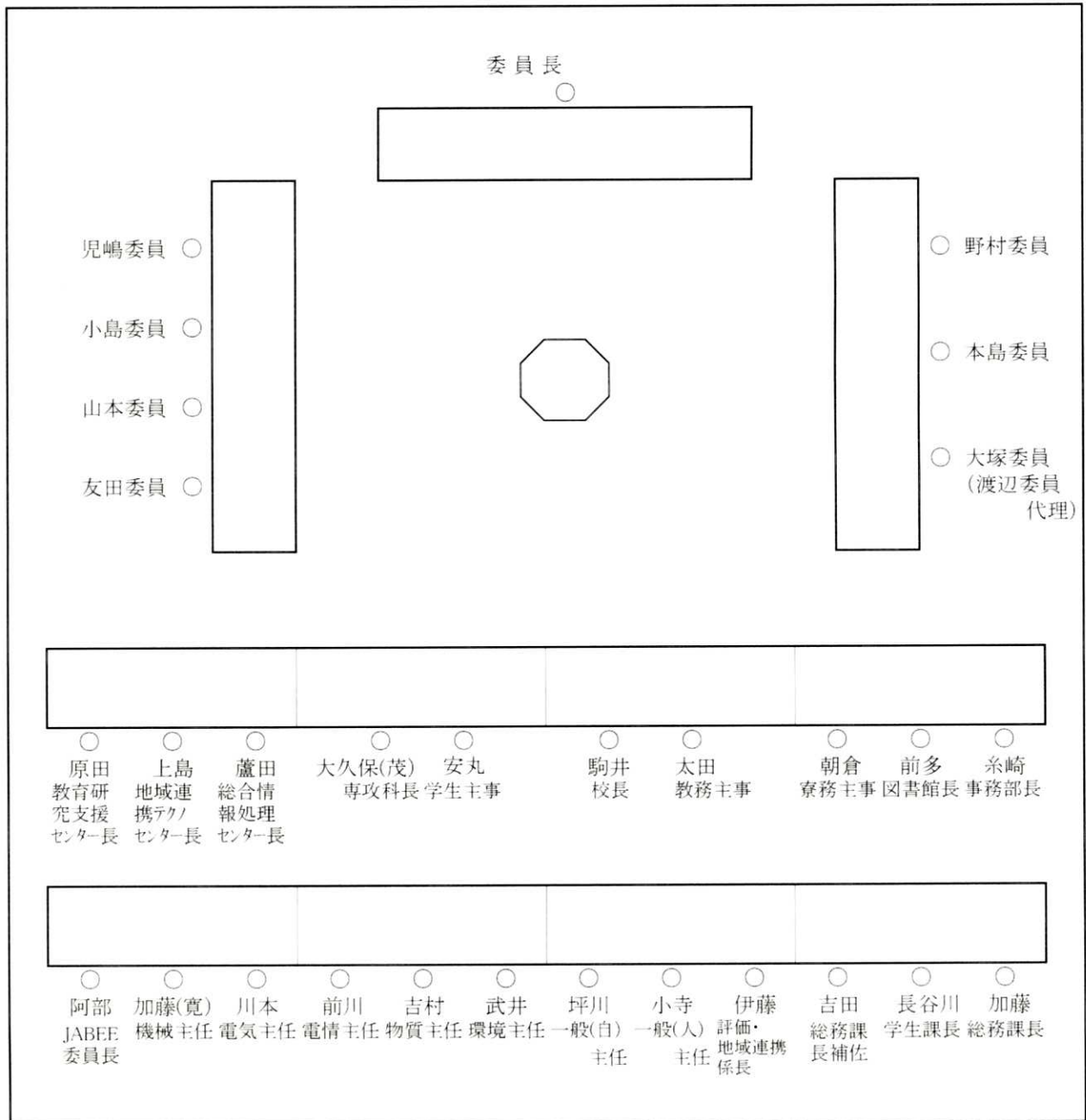
- (1) 自己点検・評価報告書
- (2) 福井工業高等専門学校中期計画進捗状況
- (3) 学生便覧(平成18年度版)
- (4) 学校要覧 2006
- (5) シラバス(本科, 専攻科)(平成18年度版)
- (6) 専攻科パンフレット 2006
- (7) 教員総覧 2006
- (8) 福井高専の歩き方 -2007 College Guide-
- (9) JOINT 2006 -地域連携テクノセンター活動紹介誌-
- (10) 平成17年度採択「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」パンフレット
- (11) 図書館利用案内 2006

IV. 本校出席者名簿

校 長	駒 井 謙治郎
副校長 (教務主事)	太 田 泰 雄 (一般科目教室教授)
副校長 (学生主事)	安 丸 尚 樹 (機械工学科教授)
副校長 (寮務主事)	朝 倉 相 一 (一般科目教室教授)
副校長 (専攻科長)	大久保 茂 (電気電子工学科教授)
機械工学科主任	加 藤 寛 敬
電気電子工学科主任	川 本 昂
電子情報工学科主任	前 川 公 男
物質工学科主任	吉 村 忠與志
環境都市工学科主任	武 井 幸 久
一般科目教室 (自然科学系) 主任	坪 川 武 弘
一般科目教室 (人文社会科学系) 主任	小 寺 光 雄
図 書 館 長	前 多 信 博
総合情報処理センター長	蘆 田 昇
地域連携テクノセンター長	上 島 晃 智
教育研究支援センター長	原 田 望
J A B E E 委員会委員長	阿 部 孝 弘
事 務 部 長	糸 崎 喜 一
総 務 課 長	加 藤 和 人
学 生 課 長	長谷川 篤 志
総務課長補佐	吉 田 文 男
総務課評価・地域連携係長	伊 藤 獎

会 場 図

於:福井工業高等専門学校メディアホール



V. 評価体制

本校運営のすべての評価は自己点検・評価委員会、研究改善委員会、外部評価である評議員会で行っている。「自己点検・評価委員会」は学校長、副校長、各学科主任などにより構成され、毎年度ごとに評価を適正に行っている。また、外部有識者からなる評議員会を設置している。毎年1回評議員会を開催し、本校の教育と研究の評価を行っている。

平成17年5月には本校本科4、5年と専攻科の教育プログラムが日本工学者教育機構(JABEE)により認定された。さらに、平成18年11月には日本工学者教育機構(JABEE)による中間審査が行われ、すべての項目が認定された。また、平成17年11月に大学評価・学位授与機構による平成17年度高等専門学校機関別認証評価を受審し、改善事項がない認定を受けた。これらについて詳述する。

(1) 評議員会による外部評価

本校の外部評価は評議員会、JABEEの受審、機関別認証評価の受審などがあるが、評議員会には福井県内、技術科学大学の大学関係者、地元の中学校関係者、福井県、地元の産業界、報道関係、商工会議所関係者を招聘し、毎年1回の外部評価を行っている。第1回は平成16年度に外部評価委員会として始まったが、これまでの外部評価委員会における検討事項、問題点とその検討結果、総評を記す。

1. 今後、本科の大学への編入がどんどん増えてくるときに、専攻科をどのようにして行くのか。大学院への進学を増やすのか、就職なのか。
--

1. 第1回評議員会とその後の検討

本校では本科、専攻科が全般的な教育・運営について協議しながら運営を行っている。本科から他大学への編入が増加しているが、学生の進路について基本的には学生の判断であるが、本科卒業生の進学先について、現在の5年生に対する調査の結果、次のようであった。

現在、本科専攻科へ進学を希望する学生は次のような場合が多い。

- (1) 地元に残る意識が強い
- (2) 研究の継続性を求める学生
- (3) 経済的理由
- (4) 将来地元就職を希望
- (5) 大学課程まで本校で過ごし、大学院から他大学へ進学希望者
- (6) 福井高専が好きだ

したがって、成績優秀者が本校専攻科へ進む場合も多く見受けられる。これに対して、他大学へ行く場合は次のようである。

- (1) 大学という名前にあこがれる。
- (2) 内容はかなり高度であるが、高専専攻科は世間の認知度が低い。
- (3) 学習環境を変えたい(5年間は長い)
- (4) 高専に入るときから、大学編入を考えていたから

以上のように、本校学生の進学に対する意識は多様であり、現在の専攻科入学倍率も高く問題はないようであるが、今後、本科、専攻科が連携をさらに深めたい。また、本科の進路指導を十分行うとともに、専攻科の魅力を充実させたい。

本科、専攻科学習内容の連携については、今後、本科において次のようなカリキュラムの検討を教務委員会などで行っていききたい。

- (1) 機械工学科，電気電子工学科，電子情報工学科で授業，実験の融合・複合を進めたい。
現在，3学科での授業，2学科での実験の共同実施が検討，あるいは実施されている。
- (2) 環境，物質工学科でも実験，授業などで一部融合を図りたい（たとえば，河川水質など）

2. 産学官の連携・共同研究は大事であるが、それを中期の事業計画の中でどこが産学官連携かはっきりしない、あるいは独創的な技術者・研究者の育成が、中期計画の中にあまりうたわれていないのではないか。

本校中期計画の、「2 研究に関する事項」で次のように記述している。

- ① 地域連携テクノセンターにおいて、東海北陸ブロックによるテクノセンターの連携（共同研究・技術相談の連携など）を図る。また、外部公募研究助成の公募内容を部門ごとに判別し校内で応募可能な課題リストを作成する。
- ② 共同研究及び受託研究や知的資源活用については、地域連携テクノセンターが窓口になり以下のとおり実施・計画している。

- 1) 地域連携テクノセンター内に地場産業支援室を設置し、眼鏡や繊維の新素材開発、また環境に優しい素材等の研究を公的機関や地元産業界と協力して行い地場産業の活性化を図る。
- 2) 地域連携テクノセンター内に伝統産業支援室を設置し、越前和紙、越前漆器、越前打ち刃物等の伝統産業の活性化と発展に寄与する。
- 3) 地域の産業界からの技術相談に対応するため地域連携テクノセンター内に技術相談室を新設するとともに、地域産業と密着した研究テーマの設定をするため地元商工会議所等との情報交換・懇談会を推進し、産業界からの技術相談・共同研究の機会拡大と研究テーマの発掘を狙う。また、地域連携テクノセンター広報誌・ホームページにより、研究者及びその研究シーズを地域へ積極的に発信する。このことにより企業ニーズと研究シーズの整合を図る。

また、独創的な技術者の育成を促すため、本校教育理念に「1. 創造性豊かな人材の育成を目指す人間教育をめざす」と明記し、各学科の目標の中でも、たとえば機械工学科では、「創造工学演習・科学基礎・生産技術演習の創成科目を継続し、創造的デザイン力を養う」。また、環境都市工学科では「PBLを積極的に導入し、創造性を養う」などとしている。

3. 英語力の強化を期待する

- (1) 本科高学年に英語授業時に英語力習熟度別クラスを設置した。
- (2) 専攻科においては現代英語の演習2単位を必修とし、TOEIC 指導を行うとともに、TOEIC 400点獲得を義務付け、高得点を保有した者を表彰した。高得点獲得へのモ

チベーションを持たせ「TOEIC 600点獲得 CD」を貸与して個別指導を行った。TOEIC-IP テストは個別指導の後、6回実施した。数学等の基礎能力確保に対して総合試験を受験させ、全員60点以上を獲得した。特別研究論文集では、論文のタイトルと要旨を英文で記述することを義務付けている。

- (3) 平成18年4月にオーストラリア Ballarat 大学と提携を結び、相互交換留学制度を発足させる。同大学では英語学習中心のプログラムを2週間程度行う。
- (4) 平成18年度より、自助努力により英語学習中心のeラーニング教室を設置し、eラーニングにより英語教育を開始する。

4. 女性が人口の半分以上を占める中、女性の職業教育ニーズにいかに対応するか。

現在、本校本科、専攻科在籍学生1,047名のうち、約1/5の200名が女子学生である。工業高専であるため、在籍女子学生数が男子学生に対して少ないのは否めない事実であるが、今後、次のようなことを検討して今後さらに多くの女子学生の入学を促したい。

- (1) 女子寮定員の増加。
- (2) 幾つかの学科への女子学生入学増加の学科内容の検討
- (3) 女子学生に対応した学校環境の整備
- (4) 女子学生の就職先企業の更なる開拓
- (5) 入試説明会における本校の女子学生現状の紹介

5. 教育環境の整備

高専制度発足以来40数年を経て、全国の国立高専では校舎改修が進んでいるが、本校では未だ改修が行われていない。しかし、本校では自助努力により、CADを整備した「ものづくりアトリエ」、「eラーニング室」などを整備してきた。今後、校舎改修を緊急に要望し、本校理念に沿った教育が可能な未来志向の空間を実現したい。特に、入学後に希望学科に転科可能な「工学基礎コース」を平成17年度より導入し、好評であるが、この「工学基礎コース」設置により人数の大きく異なるクラスルームとなるので、様々な人数と学科目的に対応したクラスルームへと改善を図りたい。また、各学科に創造教育が可能なスペースを設置し、機械工学科の校内ロボコン、環境都市工学科のブリッジコンテスト、電子情報工学科のプログラムコンテストなどの教育に対応したい。さらに、全実験室を共用し、実験実習スペースを能率的に使用する。PBL授業に対応した実験室を設置する。卒業研究アトリエを設置して学生と教員が自由にディスカッションしながら学生が研究を進める空間を設置する。バリアフリー化と耐震に適應した施設とする。さらに、このような施設設置を可能とするため、全教員室を学科ごとに幾つかの大部屋として使用したい。

2. 第2回評議委員会とその後の検討

1. 科学研究費が全国高専でトップクラスを維持している理由を伺いたい。

本校では産官学共同研究を進め、地域の産業界が本校のために平成6年に「福井高専教育研究振興会」を全国の高専で2番目に結成するなど、地元産業界との結びつきは強い。これ

らの共同研究・技術支援が教員研究として科学研究費の採択率を高くしていることが考えられる。また、独立法人化後の校長を中心とする学校運営方針にも因る。

2. 福井高専が位置する丹南地区からの学生が4割近く在籍する、非常に地域に密着した学校である。

地元の鯖江市・越前市においては早い時期から高専制度が良く理解され、本校を目指す地元の中学生も多い。現在は卒業生の子弟が本校に数多く在籍しており、親戚・縁者への紹介、地元の中学校や行政など本校を知る関係者の子弟も進学している。したがって、口コミによる入学者の数は次第に増加している。このような良い循環が丹南地区からの進学者を増やし、卒業生が近隣の企業や行政に就職することによりさらにその輪が広がると思われる。

3. 中学からの入学希望者には2つの傾向

1) 全日制高校に入りたいが、そのための受験のトレーニングと考える生徒、

2) 将来を見定めてきちんとした信念を持って受験する生徒、がある。

前者の受験生は、大学へのバイパスとして高専を受けている傾向があり、そのため、高専はキャリア教育をきちんと教育課程の中に取り入れる必要がある。一方、後者の受験生は推薦制の生徒に多い。

近年、高等専門学校から国立大学3学年（東京大学は2学年）への編入希望者は次第に増加し、本校では卒業生の約半数が本校専攻科や国立大学に進学している。高専から大学への編入が、高校から大学に進学するのに比較して容易であるのは、国立大学の編入学総定員に比べ、高専からの進学希望者が少なく倍率が1倍程度であることと、試験日が特定されていないことによると考えられる。したがって、高専に大学進学のため入学する学生は今後も増加すると考えられる。また、高等専門学校制度は高度成長時代に実践的技術者育成のために設立されたキャリア教育制度でもあるので、実験・実習を重視したものづくり教育により今後もキャリア教育を進めたい。

4. 工学基礎コースは中学にとっても非常に有り難い制度である。

平成17年度より設置した工学基礎コースは、高専への入学意思はあるものの学科を決められない中学生の受け皿となっている。今後も制度をさらに改善して行きたい。

5. 地元の鯖江市、越前市、商工会議所等と地域連携協定を締結し、伝統産業・地場産業支援を積極的に展開されていることにお礼を申し上げたい。しかし、丹南地域を中心とする地場産業への就職者が非常に少ないのは寂しい。次世代を担う若者が地元に対する関心が薄いのは寂しい限りであり、地元に着定するよう指導いただきたい。

本校は平成17年度の地元の2市と地域連携協定を締結した。また、平成17年度採択の現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）により地域への様々な支援を行っている。本校卒業生はその約半数が就職し、就職者の約半数が地元に着定している。専攻科では本科より地元就職者の割合が高い。地元に着定した学校を目指しているため、今後とも地元の企業へのインターンシップや地元企業への技術支援により、地元企業を学生に紹介して行きたい。

6. 「さばえめがねワク Waku コンテスト」全体では1000件近くの応募があったのに、地元鯖江からの応募はゼロに等しいのは何故か。地元鯖江の地場産業であるめがねに対する関心が低いのは問題である。出前授業も越前市に偏っており、鯖江市は鯖江中学1校だけである。

平成17年度は特に鯖江市の小中学校のみへのコンテスト参加、出前授業は呼びかけなかった結果、越前市などの小中学校から多くの参加があった。平成18年度は鯖江市の3中学校より出前授業の要請があったほか、さばえめがねワク Waku コンテストにも鯖江市の小中学校より多数の参加があった。

講評の総括

- (1) 全体として良く努力している。
- (2) 国際化がますます重要となりつつあり、海外インターンシップを実現されたい。
- (3) 地元に着した高専であることを実感として感じており、今年度から始まった緊急メール配信システムに感謝したい。
- (4) 担任制度、副担任制度等、生活指導の充実を図っているが、家庭的にも不安定な生徒が居るので生徒の指導に今後とも努力されたい。
- (5) 丹南に着した技術支援をしているが、福井工業技術センターとも連携を取って推進されたい。
- (6) 「何故丹南はものづくりが栄えているのか、それは、福井高専があるからだ。」に是非ともなっていて欲しい。
- (7) 人件費削減が教育研究の低下、社会貢献の低下にならないよう工夫して努力されたい。
- (8) 福井大学とも連携協力を強められたい。

3. 第3回評議委員会とその後の検討

3. 1 全体講評

全体としては、教育・研究あるいは社会貢献のいずれをとっても最高のレベルで頑張っている。

学生の受入については積極的に中学校に出向いて教員と連携を取りながらしっかりやっており、メンタルヘルスについても十分な配慮をしているなど、教育、研究において高い水準を維持している。また、産学官の連携につきましてもいろんなプロジェクトに取り組んでいて、その成果が地域産業の振興に貢献している。

法人化されて全国的な組織に組み込まれたため、統一的な方向に従わざるを得ないという厳しさはあるが、本科の定員削減と専攻科の充実という方向のなかで、福井高専にしかないものを作るなど高専として特色が出るような方向を模索してほしい。

これからもますますご努力いただき、福井高専の地位をますます高めていただきたい。

3. 2 主な課題とその後の検討

1. 工学基礎コースの制度は、保護者、生徒、各中学校では評価が高く、このような制度を整えていただいたことについて中学校関係者として感謝している。今後この制度を更に充実するよう配慮してほしい。

平成17年度に設置した工学基礎コースは、入学後に学科変更が可能なフレキシブルな制度として注目されている。全国的にも東京高専など同様な括り入試制度を導入する高専も増加している。

また、工学基礎コース設置に伴って導入したPBL型の授業「ものづくり科学」も他学科の実験ができるなど学生に好評である。今後、この制度をさらに発展させて行きたいが、現在、工学基礎コースの長所と問題点はつぎのとおりである。

工学基礎コース制度の長所と問題点

<メリット>

- ① 在籍学科の内容が入学前に考えていた内容と異なり、とまどう学生が学習に対する興味を無くし、留年・退学となるケースがあったが、この制度により学科に対するミスマッチを無くすことが可能となった。
- ② 高専入学を志望するが、学科が決められない受験生の受け皿とすることができた。
- ③ このコース設置によりクラス増を防ぐため、他のクラスも混合学級として、どのクラスにも7、8名の女子を配分した。このため、すべての1学年クラスが明るい雰囲気となり、学習態度も良くなったようである。
- ④ 「工学基礎コース」に対する興味が本校に対する興味となり、中学生に本校に対する関心が深まった。
- ⑤ 学科間の学生の移動などに自由性を持たせることができる。

<問題点>

- ① 入学時に学科を決められない受験生のためのコースなので、学科に対する志望が堅固なことが条件である推薦入学での選抜ができない。本校では、中学時に成績が上位の生徒が推薦入学で入学するため、工学基礎コースの成績は他のクラスより低くなりがちである。今後、このコースにも推薦入学選抜を取り入れる検討を行っている。
- ② 専門科目を2年次には始める必要があるため、1年間だけのクラスとなり、担任・学生とも極めて短期間のクラス構成となる。また、2年次担任は一般科目の別の教員、3年次以降は専門科目教員が担任となり、3年間毎年担任が交代する。このことは他の混合学級にとっても同じ問題点となっている。

今後、現在の制度を良く検討し、改善をして行きたい。

2. 福井県は原子力立県であるため、福井大学も福井工業大学も原子力学科を作った。高専の特色を出すためにエネルギーを含めた原子力に対する理解を学生に深めるなどの教育を将来進めていただきたい。原子力に対するアレルギーを取るだけでも良いと思う。

本校は地元で原子力発電所が数多く設置されていることより、原子力関係に就職する学生も多い。したがって、原子力工学に対してつぎのような教育を行っている。また、社会人に対する原子力の基礎講座も実施している。

- (1) 本校ではいわゆる「ものづくり教育」を教育理念としており、その一環として原子力に関する教育も、「放射線工学」などとして、関係学科で行っている。
- (2) 最近5年間に原子力関係企業、たとえば「関西電力」、「日本原子力発電」などに22名が就職している。
- (3) 平成18年度より経済産業省事業「高専等を活用した中小企業人材育成事業」において、原子力・放射線知識の習得を中心とする講座(アトムコース)を現在行っている。事業の管理法人はふくい産業支援センターであり、3年間の事業で初年度の総予算は約1,200万円である。今年度、この講座に参加している企業若手技術者は全体で40名である(アトムコースは10名)。この講座では、福井県内の中小企業が異業種から原子力関係業種への進出する際の、企業若手技術者への原子力・放射線基礎知識の習得を目的としている。
- (4) 大学及び高等専門学校における原子力の人材育成の充実を図るため、平成19年度より文部科学省と経済産業省が連携して策定した「原子力人材育成プログラム」のうち、①原子力研究促進プログラムに本校が採択された。現在、卒業研究等において、一般市民や小・中学生対象のサイエンスフェアや近隣小・中学校で活用することも可能な放射線検出器を製作し、放射線測定を行っている。

3. 英語、パソコン技術、ものづくりへの好奇心の教育が基礎学力以外に必要であると思うので、努力されているが更なる努力をお願いしたい。

本校の教育目標の二つに

- a) 豊かな創造力とデザインマインドを持ち、常に自己を啓発し、新しい課題・分野に挑戦する能力の育成
- b) 高度に情報化した国際社会に必要なコミュニケーション基礎能力とプレゼンテーション能力の育成

と、あるように、「ものづくり」と「コミュニケーション」は大きな教育目標となっている。ものづくりは、本校のほとんどの授業科目が関連するように、高等専門学校の最も重要な教育目標である。また、英語教育は重要であり、学生の卒業研究・特別研究論文やプレゼンテーションにおいて工学英語の基礎力が必要となっている。また、JABEE認定における英語力認定試験TOEIC対策としても英語教育は重要である。このような観点からコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の育成として英語教育を進めていきたい。

4. ストレスが充満していると思われるので、学生のメンタルヘルスについて十分管理してほしい。

学生のメンタルヘルスについては、現在、重要な問題の一つとなっている。本校では学生相談室を設置するとともに、教職員のFDを開催して対処している。これらによって、学生の心の問題に学校全体として取り組んでいきたい。

5. 当初は、定められた目標(中期計画)を達成できたかの評価であったが、現在はその設定した計画及び目標が正しいか、高すぎないか、低すぎないか等の評価になってきている。研究業績などを洗い直された方がよいのではないか。

中期計画については、毎年、自己点検委員会に諮り、結果の検討と新しい計画を進めている。研究業績については研究改善委員会が毎年、論文発表・学会発表などを全教員対象に調査し、詳しい報告を行っている。また、科学研究補助金の申請状況や採択状況を調べ、その報告を行っている。

6. ボランティアなど、学生を地域活動に参加させ交流を図ることにより、学校のPRにもなり、中学生とのふれあいなど進学希望者を掘り起こすことにもなるため、積極的に学生を含めて地域交流を図っていただきたい。

平成16年7月、福井は「福井豪雨」によって大きな被害を受けた。破堤があった福井市をはじめ、福井高専が立地する鯖江市においても多くの家屋で床上／床下浸水が確認された。中でも、鯖江市河和田地区では名産「河和田杉」が流下し、凶器となって家屋を直撃した。この他、流木が河道を閉塞させることで河川が氾濫し被害を拡大させた。このとき、本校の学生・教員がボランティアとして救済活動に参加した。

また、この災害を教訓として、地域のフォレストサポーターやNPOにおいて、被災した地点の再生ならびに水源涵養力の拡大を期して、本校学生、教員が地域小中学生を含めた住民が一体となって植林等の森林保全活動をその後に継続的に実践している。

また、今後も地域のボランティア社会の構築のために、積極的に参加し地域社会に貢献したい。

7. 地域連携協定を取り交わしているが、今後は金銭等の有効な支援を行うために地域の行政商工会議所とすり合わせをしたらどうか。

本校は平成17年5月に地元の2市、関係商工会議所と地域連携協定を締結した。その後、平成17年8月に文部科学省現代GP「越の国ひとづくり・まちづくりコミュニティ」の採択を受けて、地元の商工会議所と共に伝統産業とのシーズ・ニーズ会の開催などを行っている。また、地元、眼鏡枠組合及び鯖江商工会議所との共催で平成16年度よりはじめた、めがねに関するアイデアコンテスト「めがねワク waku コンテスト」も寄せられたアイデア数は1,500件になっている。武生商工会議所とは異業種交流会を毎年開催し、今後の技術協力を検討している。

これらにより、今後とも地元の商工会議所と連携を図り、本校の地域支援を進めていきたい。

VI. 議 事

■校長挨拶

本日はお忙しい中、本校評議員会にご参集賜り厚く御礼申し上げます。福井工業高等専門学校評議員会は毎年1回以上開催すると決めておりまして、それにより本日開催させていただきました。

平成17年度は昨年3月に開催させていただき、本校の運営全般にわたりまして貴重なご意見・ご示唆を賜りました。本日はまず本校の現状説明で、特に本校が置かれている立場が最近激変しておりますので、その事について私からご説明を申し上げます。続きまして3主事と専攻科長から教務関係、学生関係、寮務関係、専攻科関係について個別にご説明をしたいと考えております。最後に教務主事から昨年度の評議員会でいろいろご指摘賜りました事柄それぞれにつきまして本校の運営にそのご意見をどのように反映させ、そして改善に努めてきたかをご説明し、併せて平成18年度はちょうど本校の、そして機構の中期計画の3年目に当たっております。あと19、20年度で第1期の中期計画が終了し、平成21年度から第2期の中期計画に入るわけではありますが、本校の中期計画の進行状況についてご説明申し上げたいと思っています。

限られた時間ではございますが、評議員の皆様におかれましては忌憚の無いご意見を賜りたいと考えております。今後の福井高専のためにお知恵を拝借いたしたく、どうかよろしくお願いいたします。

■出席者の紹介

校長より、福井県工業技術センター友田所長が新たに就任されたこと及び福井新聞社の渡辺論説委員長欠席のため論説委員の大塚潤三氏が代理出席された旨の報告があり、その後、各委員より自己紹介が行われた。

■委員長の選出

委員の互選のより、児嶋委員（福井大学長）を委員長に選出した。

■概要説明

(1) 高専の最近の状況等について……駒井校長

(2) 本校の概要について

- ・教務関係事項 …………… 太田 泰雄（教務主事）
- ・学生関係事項 …………… 安丸 尚樹（学生主事）
- ・寮務関係事項 …………… 朝倉 相一（寮務主事）
- ・専攻科関係事項 …………… 大久保 茂（専攻科長）

※説明に用いた資料は参考資料として添付。[35～53項参照]

(3) 平成17年度第1回評議員会における教育・研究改善事項等について
平成17年度第1回評議員会（平成18年3月27日）以降の教育・研究改善事項
について太田副校長（教務主事）から説明があった。

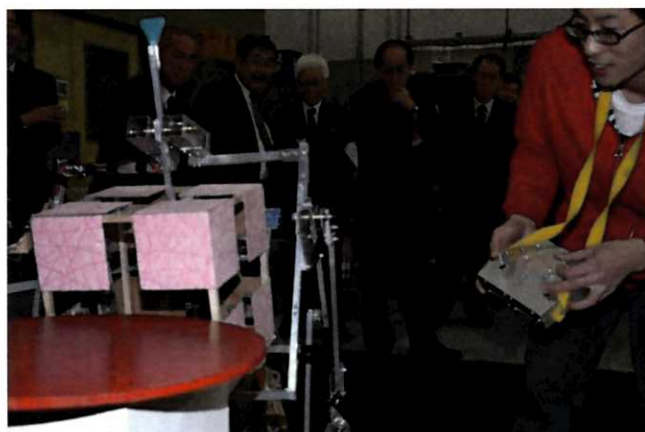
(4) 福井工業高等専門学校の中期計画進捗状況について
本校の中期計画に対する進捗状況について、太田副校長（教務主事）から説明があ
った。

■教育・研究環境視察

ロボコン実演を見学した。（夢づくり工房ドリームラボ）



【ロボコン実演視察】



■全体討論・提言

(児嶋委員長)

ロボコン実演を見せていただきまして、どうもありがとうございました。元気の良い、一生懸命やる気のある、目の光った学生さんで、本当に気持ちがいいですね。ありがとうございました。それでは只今から全体討論と提言に入りたいと思います。最初に小島先生、どうぞよろしく願いいたします。



福井大学 児嶋 眞平 学長

(小島委員)

意見よりも、先ほどの先生方のお話の中から2～3、質問をしたいと思います。まず、工学基礎コースの学生が8名いて、各科に分けていますが、その8名はカリキュラムを選択するとき、彼らだけ特別にいろいろな所のカリキュラムを取れるということですか。

(太田教務主事)

工学基礎コースを平成17年度に取り入れるにあたり、これまで1年、2年は主に英語、数学、国語、理科、社会だったのですが、その中に、くさび形教育と言いまして、少しずつ専門科目をやってきました。すでに1年生、2年生で専門科目を大分入れていたのですが、1年生で専門科目を余りたくさん入れますと変われなくなってしまいますので、1年生における専門科目を3つにいたしまして1つは情報リテラシーみたいなもの。もう1つは製図。もう1つは今まで各学科の基礎で、これまでは機械工学科は製図とか電気電子工学科は電磁気学とか、電子情報工学科はC言語の基礎などをやっていたのですが、これまで、学生は1年生の時に何のためにこんなことをやるのだろうかとか、物足りなさがある面白みに欠けていたところがありました。そこでせっきく高専に入っても自分の専門科目に対する憧れが消える場合もままあった。留年者とかもそのことがあったのかもしれない。ということで、情報リテラシーと製図のほかに、3単位の大きな科目としてものづくり科学という新しいPBL型授業を導入いたしました。このものづくり科学というのは各学科が3つずつ、何か面白いような実験テーマ、例えばスターリングエンジンの基礎のようなものを作ってみようとか、あるいは情報系のソフトを作ってみようとか、虹はどうして赤いのか、あるいは臭いの科学とか、いろいろな面白いテーマを学生が自由に2つ、3つ選んで、それを1年間かけて自主的にやって、最後に自分が発表するという科目を1年生全部に導入いたしました。そこで学科を決めて入学した学生は、自分が入った学科のテーマを多く取り他の学科のテーマを一つ選択する、たとえば、機械の人が情報系、あるいは化学系をやってみるのも良いと考え、ひとつやってみることにしたのです。工学基礎コースの学生は、自分の最初に入っている学科のテーマをひとつだけ選んで、後は好きに選べるとして、自分の興味のある学科から選べるようにして、統一した大きな科目を入れました。そこで次の年に転学科がしやすいようにしたということです。

(小島委員)

太田先生のお話の中でオープンカレッジの時に特別にEarly Summer オープンカレッジという名前がついていたのですが、あれは特別に何か。Early Summer という時期だけのことですか、中身が違うのですか。

(太田教務主事)

特別には。Early Summer オープンカレッジという、あまり良くない名前なので、いろいろ考えましたが良い名前がなかったのです。これまでのオープンカレッジは実際上のオープンカレッジではなくて、うちの学校の各学科の学科内容を5年生が8月の2、3日あたりに紹介し、半日だけ見てもらうわけですが、中学生あるいは中学校関係者、保護者の方を1,000人近くお招きして、順番に全学科の実験を特別にその日だけ5年生が実験テーマを作って見ていただく。これをオープンカレッジと呼んでいたのですがやっぱりオープンカレッジとは平素の私どもの学校の授業をオープンにするということにあると思ひまして、また中学校サイドの方々からも、中学生は特に部活、クラブ活動を見たいという声がこれまでのアンケートにありましたので、6月の、今年は土曜日を予定していますが、その日に来ていただき、本来は休みなのですが、授業を普段どおりに行ないまして、その授業を見ていただく。部活、クラブ活動を見ていただくことをやるのですが時期が Early Summer ですので Early Summer と名前をつけたというだけです。

(小島委員)

専攻科の説明の中に早稲田大学大学院に推薦入学の覚書を交わしたとありましたが、これは、我々国立大学法人だったら別に推薦制度そのものがありますが、これは特別に枠をもらったとか、なにかそういうことですか。



長岡技術科学大学 小島 陽 学長

(大久保専攻科長)

1名だけ推薦枠をもらいました。早稲田大学のキャンパスは東京の高田馬場をイメージしますが、実は北九州に大学院があり、そこに外国人の大学院生が多いので、各専攻科を回って協定を結んでいるとのです。

(小島委員)

これは早稲田でやられるとしたら、またどんどん増やしていくのですか。

(大久保専攻科長)

微妙です。

(小島委員)

学生関係で、低学年に混合学級を入れているとありましたが、混合学級とはどんなイメー

ジなのですか。

(太田教務主事)

1年生を混合学級にしている訳です。というのは、工学基礎コースを平成17年に作りまして、工学基礎コースは40名1クラスですので、これまでと同じように5つの学科を作りますと1年生が6学科になってしまいます。これでは教えるのも大変ですし、混合学級もこれまでいろいろなメリットも上げられておりますので、平成17年に思い切って、その他の学科も全て混合学級にして、各1クラスから5クラスみたいなものですが、そこも全て混合学級にしました。その結果メリットを感じられるのですが、例えば学生も女の子を平均して7~8名ずつ振り分けたとかやりましたし、非常に明るいクラスになりました。

(小島委員)

後は寮のことですが、大学と違って教育寮としてたいへん皆さんご苦労していると思いますが、話の中に女子寮の改修が出てきました。これは国から改修費が出るのですか、それとも高専独自に金を掛けるのですか。

(駒井校長)

もちろんこれは国です。高専独自では手に負えませんので、文部科学省に概算要求をしてお願ひしています。

(小島委員)

留学生が6名、おりましたね。寮に入っているのは別にして、高専で留学生はどういうルートから入ってくるのですか。

(太田教務主事)

現在マレーシア、ブラジル、東南アジア、アフリカから留学生が来ていますが、これは中曽根首相時代に中曽根首相が主にアジアの外国から日本へ招こうという計画をされておりました。それにより外務省を経て来日し、私どもが独立法人になりましたので、機構を通して来られています。留学生には国費留学生と政府留学生がいます。

(小島委員)

私費での留学生はいないのですか。

(太田教務主事)

全部国費と政府留学生です。私どもの学校はまだ数が少ないのですが、もっと数が多い学校もあります。

(児嶋委員長)

はい、どうもありがとうございました。今たくさんのご質問をいただきましたが、同じような質問がありましたらどうぞ。本島さんどうぞ。

(本島委員)

先ほどの工学基礎コースの話なのですが、工学基礎コースの競争率はどのようなのですか。一般的なものよりも高いのか低いのか。さっき説明を受けたかもしれませんが。

(太田教務主事)

工学基礎コースは転科ができるコースで、これは実際に願書を出す時に願書に工学基礎コースを希望の「有・無」の欄がありまして、そこに「有」と付けてありますと工学基礎コースに入れるかどうかが決まるわけです。今年は募集中ですが、去年は全志願者の8割が工学基礎コースを志願していらっしゃる。従って非常に倍率は高い。成績の上の人が全部入られる。学力試験だけで推薦はないのです。推薦はやはり、この学科に入りたいという意思が強い人という意味がありますので、学力だけで取っていますが、そのうちの8割という、非常に倍率が高く成績の上の人だけが入っているという状況です。



信越化学工業(株)磁性材料研究所
本島 正勝 所長

(本島委員)

私の場合、大学の工学部に入って、学科はその後ですが、全体のメインはそうすると不都合があるのですか。全体を今のように入学後にすると、さっきの競争率というのか、志願者が多いということは、そのほうが全体に希望者が出るのではないかという感じもするのですが、そういうことはないですか。

(太田教務主事)

私もそう思います。全体をそうするのをくくり入試と呼んでおります。学科を決めないで福井高専として一本で合格を決める。それは今から3年前に私どもは検討したのですが、その頃まだ機構ではなかったので独立法人になっていませんでしたから、文部科学省にそれを相談しましたら、それは駄目だと。どうしてかという、大学設置基準と同じような国立高等専門学校設置基準がありまして、これは私どもの一番上にあり、大学設置基準と同じ高等専門学校の基準ですけれども、その第5条に国立高等専門学校の学生は学科を定めて、各学科で募集すると書いてあるのです。それに抵触するとおっしゃいますので、それならば1つの大きな学科の名前でいくという方法もあるのですが、文部科学省は結局それを逃れ道だろうと思いますので、くくり入試はできない。それをやった高専はないというので、私どもはそこで校長と一緒に考えたのが今の方法です。しかしその後、私どもの学校がこれをやりましたら、それを文部科学省が目ざされて、私どもの学校と同じ事を来年からしようというのが、宮城高専とか、いくつかございます。また東京高専は今の私どもと同じように、全部に対してこれをしています。これは私から考えると、今は独立法人になりましたのであまり文部科学省はおっしゃらないのですが、設置基準に抵触するのではなかろうかと思っています。だから、私どももこれを考えているところです。

(児嶋委員長)

だんだん面白いところへ質問が来ていますが、辻崎先生どうぞ。

(辻崎委員)

私は中学校の立場からこの制度をずっと見せていただきました。17年度にこの制度を各中学校で説明していただきましたけれども当初は初めての制度だということでなかなか理解を浸透するのに多少時間がかかった訳ですが、こうやって制度が実際に動いて見ますと、生徒、保護者、各中学校では非常にこの制度の評価が高くございます。先ほどの8割という話がありましたが、今おっしゃったように本来にはくくり入試のかたちで生徒たちを受け入れてくれるとありがたいわけですが、それは現在の制度上では無理だという話の中で、こういう選抜方法での受け入れ態勢を整えていただいたことについて、我々は非常に感謝しております。そういった意味では今後、この制度が更に充実していきけるような配慮を一層していただけるとありがたい。先ほどの説明の中でカリキュラム上、充分その点で配慮されていると伺いましたので、私も機会があれば中学校関係者にその辺の努力を伝えていきたいと思っております。

またもう一つ、中学校側として感謝しているのは担任制度です。混合学級による担任制度。中学校の生徒はご存知のように学級担任制度がキッチリとベースになっています。15歳から16歳、3月から4月に変わっただけで困った事があったり、どうしたらいいかわからない時に、いったい誰に相談したらいいのだろうかとか、そういう事で大きなカルチャーショックみたいなものを受けることではないかと思うのです。その辺を上手にソフトランディングしてもらえようような配慮をされている。それが今回の報告書の中にも随所に見られているということで、私達としては非常にありがたいということでございます。これが、中学校の送り出す側の者としての感想です。

ちょっと視点を変えまして、その他に私どもの学校でもこの学校の先生方に来ていただいて出前授業などをしていただきましたが、その他に地域連携とかいろいろな所で先生方が出かけて行って、産学協同などの事業に積極的に参加されている。そういった活動は非常に宣伝にもなりますしメディアにもどんどん取り上げられて、そういった点では高専の評価はだんだん地元で定着し、高い評価を得られるようになってきているのですが、私もそういう学校の教員の一部ですので、そういった点からちょっと心配するのは、先生方が非常に厳しい勤務条件に置かれているのではないかという懸念をするわけです。本来はもっと生徒とじっくりと向き合って、本来の専門領域あるいは授業に充分時間を掛けていただきたいなという思いの反面、いろいろな所からいろいろな要請が来ると、自然と生徒の教育にも当たらなければならないし、地域や外部からの要請にも応えなければならない。そういった中で今後、学科再編とかの問題も迫ってきている。生き残りのための必死の、懸命の努力をしなければいけない当面の課題がある中で、高専の先生方は非常に努力をされている。その辺で、さっきの説明を聞きながら健康障害とか、オーバーワークになるのではないかという気もしたわ



鯖江市中学校校長会
辻崎 正則 会長

けです。

(児嶋委員長)

今のご意見で、混合学級による担任制度、あるいは今の先生のお忙し過ぎるのではないかというご懸念に対してどのような。はい、どうぞ。

(駒井校長)

後半の、辻崎校長からご指摘をいただいたことはまさにその通りです。私がここへ赴任いたしましたして4年を終わりにかけているところですが、赴任した当初と今を比べましても、明らかに先生方の負担は増えております。従ってご指摘いただいたような先生方のいろいろ精神的あるいは肉体的に疲労しておられるというのはよく理解しているつもりです。その意味で、いろいろ舵取りをしなければならないのですけれども、逆に、大学もそうですが、自ら外部資金を取ってきて、研究費を自分で賄いなさいということは機構からもしょっちゅう言われています。そうしますと、先ほど教務主事が報告いたしました現代GPこれもある意味社会活動なのです。もう一つ、これは心しなければならないのですが、経済産業省の高専等を活用した中小企業人材育成事業でも、中小企業のための事業であって、これは我々の学生にはそれほど影響がない。むしろ先生方が土曜日、せっかくの休みを潰していただくことになっています。したがって、私としてはこれから何でもいいからどんどん申請して、もちろん外部資金が若干ながら入ってくるわけですが、それは心して、あまり本校の教育、研究、そして本校の学生教育に全く無縁のものは断ろう。積極的に応募しないようにしないといけないと思っております。高専によっては何でもかんでも申請している所もあるようですけれども、私の所はそうではなくて、あくまで本校の学生、本校の教職員が教育の原点に立ち返って、今後福井高専を運営して行くところで、舵取りはこれからますます肝心になると思います。

それから前半の工学基礎コースについては太田教務主事が説明します。

(太田教務主事)

混合学級の担任制度についておっしゃっていただきましたが、私どもの学校は担任制を1年生から5年生まで取っていきまして、やはり高専の一番大きな特徴は担任制度にあるということです。この評議員会でも2年前に、今後とも続けてほしいというご講評をいただきましたが、学生の4年5年は大学の1年2年に相当し、ちょっと手厚く過ぎるくらいの担任制度をやっています。自主独立の精神が失われるとも言えるのですが、でもやはり学校の外からは担任制度を今後とも続けてほしいという声が圧倒的に多くございますし、全国の高専が担任制度を採っておりますので、私どももこの担任制度を今後とも続けていくつもりでございます。

(児嶋委員長)

はい、ありがとうございました。他に何かご質問ございませんでしょうか。ご意見でも結構でございます。工学基礎コースの非常に斬新な試みがどのように進展していくのかは、皆さんご興味を持たれて、それに対して多くの質問が集中したように思います。その他、今日のご説明をお聞きになりまして、ここの所はどうか、あるいはこの辺はどうなっているのか

というのは、はい、本島さん、どうぞ。

(本島委員)

さっきと少し関係するかもしれませんが、例えば私も学科を聞いて、物質工学科はどんなものなのか、中学校の先生はお分かりになっているのかどうか分かりませんが、一般的には非常に分かりにくい名前です。特に受験生あるいは受験生のお父さん達がイメージできるのかどうかとなると、私も物質工学科と聞いてどんな事をやっているのかは内容を読ませていただくと化学系なのだなどというのがだいたい分かる程度で、そうすると学科を選ぶことが非常に難しく、かつ受験する気になり難いのではないかと。特に中学生の生徒そのものが望まないといけないとするなら、非常に難しい学科で、しかもお父さん達も学科を聞いてどんなことをやっているのか分かり難い。昔みたいに機械や電気なども非常に難しいとすれば、何か新しいネーミング、あるいはイメージを作らないと、特にさきほどのように非常に受験生が減っている、あるいは競争が厳しくなっているということと大事なのではないかと。特に理系離れは我々も関心がありますので、何とかもう少し上手い方法がないか。私にも良い案はないのですが、そんな気がします。

(児嶋委員長)

例えば物質工学科は倍率が低いということはないのでしょうか。

(太田教務主事)

ここ数年好調でございまして、それはいろいろな事が考えられますが、ノーベル化学賞の方が多く出たせいかと思っております。それで、やはり本島さまがおっしゃいましたように物質工学科とか環境都市工学科などはちょっと分かり難い名前です、例えば、物質工学科で申しますと今から10数年前までの元の名前は、工業化学科なのです。インダストリアルケミカル、工業化学ですけれども。それで非常に倍率を落としまして、1.4倍ぐらいいまになったことがありました。そこで全国の高専の多くが物質工学科を名乗っています。物質工学科にして2.数倍になりまして、ここ数年間は非常に高い倍率、また、学力試験では一番成績上位が物質工学科から出ているとか、特に女子学生が多く、成績の良い女子が非常に増えているというところです。

だけど今おっしゃいましたように、物質工学科というのはやはりマテリアルでもないわけで、いろいろな機会を捉えまして、入試説明会とかEarly Summer オープンカレッジとか様々な時に、お手元の福井高専の歩き方の小冊子を配りまして、福井県の全部の中学生に渡るくらいに配付しています。アドミッションポリシーとは入学を受け入れる方針という、あまり好きにはならない言葉ですが、この中で物質工学科は、化学と生物の世界で第一歩を踏み出したい人とかが書いてあります。このようなアドミッションポリシーあるいは実際の学科のカリキュラム、あるいは就職先などを示しまして、これを中学生に相当PRして内容を分かってもらおうと。環境都市工学科も同じですがそれをやっているところです。ただ、このまま同じ名前が何十年間も続くということはもちろんありえませんが、そのような学科の名称も含めた再編も大急ぎで考えているところです。

(児嶋委員長)

はい、ありがとうございました。入試説明会のアドミッションポリシーで分かりやすくですね。本島さんどうでしょうか、分かりやすいでしょうか。他に、教育関係、教務関係、それからお話をいただいた専攻科の問題、それから寮の問題、学生対策関係ですけれども、何かご質問、ご意見はございませんでしょうか。そろそろ全体討論、提言の形に入る時間かと思いますが。それぞれの方からご意見をいただき、またご提言をいただければと思っています。大塚さんどうぞ。

(大塚委員)

私は県の自殺・ストレス防止対策協議会の委員もしてまして、その中で最近ストレスがかなり充満していて、子どもさんまでけっこう広がっています。先ほどロボット操作の学生さんが皆さん元気にやっていたら、その心配はまずないのですが、やはり学生さんのメンタルヘルスの面で十分に管理をしていただきたいです。優秀な人材がたくさんおりますから、一人たりとも脱落すること無いように充分管理をしていただきたい。合わせて先生方も先ほど校長会の先生がおっしゃったようになりかなり忙しくなっていますので、ご自分で身体と心の管理をしっかりしていただかないと、症状が出た時点ですでに進行しているということでもかなり危険ですので、その面でもよろしくお願ひしたいです。それからボランティア



(株)福井新聞社
大塚 潤三 論説委員

とか地域コミュニティに学生さんと一緒に出ているとのこと。地域交流を図る意味でどんどん学生さんを、もちろん上級の大きい子が対象だと思いますが、そういう子をもっと地域にどんどん出していただいて、交流を図っていただくことも学校のPRにつながりますし、出先での潜在的なここに進学を希望される子どもさん達とのふれあう機会も充分あると思います。そのところから進学希望者を掘り起こすというやり方もあると思いますので、どんどん地域との交流を図っていただきたいというのを私がお願ひしたい項目でございます。

(児嶋委員長)

もうご提言をいただきました。

(駒井校長)

今ご指摘をいただきましたメンタルヘルスについては、高専機構ならび本校としても非常に重点課題の一つだと考えております。つい先月になりますが、毎年やっている全国高専の看護師と学生相談室長全員を集めまして、1泊2日で情報を持ち寄り、ケーススタディをやり、専門家の渡辺先生から専門の精神科医としてのご忠告等をいただいて、レベルアップをしています。そして参加した看護師と学生相談室がそれぞれに経験を積んできて、結構レベルが上がってきたと思います。本校にも学生相談室と保健室の両方がありますが、学生にとって一歩でも近づきやすい状況にしたいと考えていて、保健室と学生相談室と相談しな

から環境を変えるには最大限の気を配り、そして気を使っています。ご指摘のように、非常に大切な問題です。

(児嶋委員長)

先ほど安丸先生からもその話を非常に詳しく聞かせていただきましたが、何かコメントがありますか。よろしいですか。小島先生、どうぞ。

(小島委員)

今のメンタルヘルスの話と近いのですが、研究室などで学生の事故はありませんか。実は我々の所でも最近2件ばかりありまして、チアリングで指をやったとか、そういう意味で安全教育と学生傷害保険の話はどういうふうにされていますか。

(太田教務主事)

傷害保険は日本学生支援機構の保険に学生全員が入っていきまして、登下校時、あるいは授業中、実験中の保険がそれぞれ出ることになっています。やはり残念ながら事故がございまして、先週も一人、体育のバスケットの授業中に複雑骨折をいたしまして全治一ヶ月になっています。何とか支給になりました。

(小島委員)

私どもも学生が傷害保険に入って、せっかく金を集めてやっているのですが、ご存知のとおり2、3日前、東大が、大学で2800万円を用意して、全員学生の保険に入るという新聞がありました。そういうことは少ししておいてやらないといけないと思います。

(太田教務主事)

そういう授業中の事故もあるのですが、一番多いのはクラブ活動中の事故です。これがやはり一番多いのが野球、柔道、ラグビー、ヨットです。うちの学校ではあまりございませんが、このへんは相当な重大事故が発生していますので、日本学生支援機構の保険に入っております。

(児嶋委員長)

安全教育のほうはいかがでしょうか。

(安丸学生主事)

安全教育としましては、救急救命法のAEDを用いた講習会を、学生を含めて行っています。

(児嶋委員長)

友田さんどうぞ。

(友田委員)

私は初めて参加させていただきました。先生方の、高専さんの幅広く深い学校経営と言

ますか、感動いたしました。まさにコンサルタントができるくらいではないかと、僕は聞かせていただいてびっくりしております。僕らの所は立場が違いますが、悩みの共通点は共有できるのではないかとということで、今後ともいろいろと教えていただかなければと思う所がたくさんございます。私のところはいろいろな部があり、その部で研究もしますし、業界対応をいたしていますが、例えば先ほどのロボットなどを見せていただきますと、機械工学も電気電子も情報もみんな関係があります。設置基準をおっしゃっていましたが、私はそれが全然分かりませんが、例えば簡単に言うとロボット工学科を作るというのは可能なのですか。ロボットに視点を置きますと全部関係がございますね。

(駒井校長)

もちろんカリキュラムがきちんと構成でき、機構の設置審議に諮りますが、可能です。

(友田委員)

わかりました。我々もメカトロ研究グループを作りまして、今後の研究部の設置にいつも頭を悩ませているときに、共通学がどうかと。今要するに遺伝子工学やナノテクノロジー、ロボティクスはこれからの時代を担うには特にナノテクノロジーとロボット工学が注目されているので、高専さんの独自を表すためにもそういうものも必要なのかなという気もいたします。それから大学でもどこでも同じで、我々も同じですが、生き残りをかけて独立行政法人化というのはご指導によってなっているのですが、大学は分かるのですが、高専さんは、言うなれば高校1年からの学生さんを受け入れるわけですね。



福井県工業技術センター
友田 茂 所長

お聞きしますとほとんどが大学に負けないくらいの対応をしていますね。産学官にしましても。そういう独立行政法人化はスムーズなものでしょうか。高専の立場で無理がないかということですか。なんか、大学とは違ってちょっと無理があるような気がします。

(駒井校長)

独立行政法人化はこちらが希望してなったわけではなくて、文部科学省並びに日本政府の方針で法人化されたわけです。だから、それは違います。

(友田委員)

ですから、我々のところも同じだと。ということをごどこから発信して「おかしいのじゃないか」と言うべき所に向かって言わなければいけないのかなと思います。それからもう一つは、生き残り必死という言葉がそこらじゅうから聞こえてきますが、高専さんはお国の方針によってある時期作られたのですね。僕らが高校入試ぐらいの時でしたか。今後の先行きは高専というスタイルを見ると、先行きはどのようになると見ていただけるのですか。

(駒井校長)

すごく難しいのでとても私がお答えできる範疇ではないのですが、そういうご質問が出るかもしれないと思ひまして、私の最初の、本校が置かれている立場をご説明いたしました。これは機構が上部機関に当たりますが、そこから平成21年から5ヵ年で始まる第2期中期計画で本校の学校内における学科統合、専攻科、重点化の方針で進むように言われているのです。それもお答えできる範囲は限られています。非常に狭い範囲で最上解を持って来いということですので、最初のお話のような見解で進めているところです。

(友田委員)

はい、よくわかりました。非常に難しい問題ばかりで、我々が抱えている問題も難しく、お国の方針も分からない所もありますし、時代の流れで作られた物を時代の流れでいろいろ改革しろと言われても先行きが見えない結果も皆さん方は見ていらっしゃるし、非常にたいへんだと思いますが、とにかく感激しました。参考にさせていただきます。

(駒井校長)

ありがとうございます。

(児嶋委員長)

ありがとうございました。その他に何か。

それでは全体討論からご提言に入りたいと思いますが、何か、こういうふうにしたらどうかとか、もう既に皆さんからこうしたらどうかというご提言も含めたご意見をいただいておりますが、何かご意見はございませんでしょうか。小島先生、どうぞ。

(小島委員)

私も実は昨年度大学授与機構の高専評価をいたしまして、高知高専と鈴鹿などいくつかを見せていただきました。とにかく高専の先生方は全体のお話の中でたいへん頑張っておられるというのは皆さんの認める所だろうと思います。一点、年次評価をお配りしていただいておりますが、左側に中期計画があって、右側に年度ごとのがあります。実は我々の大学もそうですが、この一年前に暫定評価をやりますと言われていたのですが、お聞きになっていると思いますが、我々の最初の約束では計画を立てて、目標を達成されているかどうかを評価するという話でした。ところが今となると設定した計画とか目標が低過ぎないかとか高過ぎないかを評価するというのです。ですから今まで言っていたのと違う評価をするというのが、多分認定評価をされたのでその時のデータがかなり使えると思いますが、行政とか、全部もう一度そういうのを洗い直すとずいぶん違うと思います。

(駒井校長)

例えば、非常に分かりやすい数値目標として中期計画がスタートいたしましたのが3年前になりますが、5年後、平成20年度末に全国高専の入試倍率と受験生総数は18,500人と、今の1.8倍から1.9倍です。当初から我々全高専の校長は高すぎる。とんでもない数字を言ってくれるのではないかと。それは通らなかった。機構の専務理事が絶対これは要る、18,500

人だと言っていたのです。でも明らかにこれは昨年から分かっています。明らかに無理なのです。だから当然、この数字は無茶苦茶な数字なのです。たぶん、あと2年ありますから、その時は1.6倍ぐらいになると思います。とても2倍にはできないのです。だから先生がおっしゃったように分からないまま、数字目標を高めればいいたろうと。でもそれは明らかに到達できない。だからそれは中間見直しがあって然るべきだろうと現在それは提言しております。

(小島委員)

ちょっと気になるのは、高専機構それ自身の生き残りも含めて伝わってくるのは、例えば本科の学生定員を減らして専攻科を充実しますという言葉があるのですが、それは裏をひっくり返すと教員を削減する、定員削減を含むということですかね。

(駒井校長)

含みます。ただし、機構からの文書によれば、1学科に14名の定員削減がある。なされる。ただし、専攻科充実という名目で7名を配属させる。だから14名減で7名回復しますから、7名を新たに専攻科あるいは地域連携に貢献のための新しいポストに使ってよしいという計画を持って来なさいということです。先ほどご指摘いただいた地域連携、地域貢献教員を作るといたします。その人間は中学校へ出かけたり、あるいは現代GPとか、外部との連携専任教員ができるわけです。そうすると内部の教育に専念する方の時間に余裕ができるわけで、そういう意味でも余裕ができることは事実です。ですから我々としても、言われている枠もありますし、その線もやっていかなければ駄目だろうということです。

(小島委員)

ご指摘のとおり、大学でやることはやらなければならないというきつい立場にありますが、福井高専は科研などに頑張っておられる。ただ中期計画の中に科研申請を義務化するという言葉が若干あったのですが、これは大丈夫ですか。

(駒井校長)

これは校長からお願いをするだけです。そしてぜひ、今年申請されなかった方は、19年度に申請されなかった方は20年度に申請してくださいということを研究改善委員会から個別の先生にお願いをし、もし何かできることがあればおっしゃっていただきたいと、義務化というのはぜひお願いしたいという形でございます。

(小島委員)

我々大学も全く同じことで、義務とまで力強く言えなくて、皆さんにお願いをしています。教員の方はたいへん頑張っておられます。

(児嶋委員長)

ありがとうございました。今回、私は全く質問をせずに、皆さんに発言ばかり要求しているようで、どうも一方的で申し訳ないのですが、提言の前に私から二、三気が付いた所を提

言も含め話させていただきます。ひとつは人件費削減があります。大学の場合に人件費削減があると、ひとつの方策としては定年でお辞めになった方に、新制度である程度授業を担当していただく。非常勤講師代は僅かを払いますが、そういう形で授業のコマ数をなんとか維持しています。さらに、特に入試などでは高等学校の校長先生をお辞めになった方で入試担当していただいていた方を、今度は大学にお迎えして客員教授になっていただくとか、そういう形で客員教授をできるだけ増やしています。特に産官学連携の客員教授あるいはコーディネーターを増やすという工夫をしております。ある程度人事の柔軟性が必要になってきていると思います。まだそこまで踏み切っていない様子ですが、その辺についてどのようにお考えでしょうか。

(駒井校長)

今児嶋先生にご指摘をいただいたことで、いわゆる雇用延長法案、定年延長法案が既に可決されています。本校の教員は63歳が定年ですが、65歳まで希望があれば雇用延長をしなければならない。しかもその場合、常勤で雇用延長をするとそのポストは全く使えない。非常勤であれば使えるということです。次にこれは高専だけかもしれませんが、非常勤講師手当が年々削減されておまして、今年で言いますと、19年度で1学科500万円、5学科で2,500万円以内に抑えなさいというお達しが来ています。ところが平成18年度の本校は2,750万円ぐらい出ていたのです。そうすると250万円がはみ出ますと、これは研究費から勝手に賄えません。ということで、これは各学科の先生方に非常に無理をお願いいたしまして、教員の先生方のご負担が増えているわけですが、2,500万円に収めました。だから今おっしゃったようにすでに原資そのものが払底している状況で、それを考えていることをございます。

(児嶋委員長)

そうですか。本当はそれができますと人件費削減に対応できるのですが、そうですか。もうひとつ、提言と言うか質問ですが、原子力立県の福井県、高専は特色を出していくこともひとつの生き残りの方法だと思いますが、福井大学もご承知のように、大学院の方は原子力専攻を作らせていただきました。福井工業大学は学部の方で原子力応用技術工学科を作られました。私は原子力はある意味でルネッサンスになりましたので、行け行けドンドンの時代になって入って来たと思います。ですから少なくとも、そうでなくても、原子力に就職する学生さんもたくさんおられると思います。原子力の方に進まれる方。就職ですね。ですからもう少し原子力あるいはエネルギー教育も含めた原子力に対する理解を生徒さんに深める教育について、将来的には取り組んでいただく必要があろうかと私は思っています。まだそこまでは行っておられないかもしれませんが、現状はどうなのか、これからどうなのか。あまり意識しておられないかもしれませんが、どうでしょうか。

(駒井校長)

原子力に関する取り組みを申し上げますと、先ほど教務主事がご説明をいたしました。経済産業省の高専活用人材育成支援の二つのうちのひとつのアトムコースということで、福井県下の中小企業の技術者を対象に本校の実験室を使って、放射線取り扱いのための基本的な

講義を続けております。もうひとつ、これも最近の新聞にも出ましたが、福井県鉄鋼業協同組合連合会と連携協定を結んでおりまして、その協定の代表として鉄鋼業共同組合連合会の若手技術者と本校の間で原子力用探査ロボット開発の共同研究について、これを開始しようと、スタートしようとしています。教育的な見地からは本校にも何人もその専門家がいますので、内容としては部分的にやっているのではないかと思います。

(児嶋委員長)

それは全学年、全校の生徒さんにエネルギー教育、原子力教育をまだされていないということですか。

(駒井校長)

まだしていません。電気電子工学科の中では先生がおっしゃっているような事はやっていますが、全校的にはやっていません。物質工学科はやっています。

(児嶋委員長)

機械工学科ではやっていないのですか。

(駒井校長)

2学科だけでございます。

(児嶋委員長)

将来的に多分その分野の教育が必要になってくるのではないかと思います。

(駒井校長)

今ご指摘いただいた原子力を含めてエネルギー教育は地球環境問題も含めてたいへん大事な問題ですから、5学科全部に対してエネルギー教育を考えていきたいと思います。ありがとうございます。

(児嶋委員長)

エネルギーの分野に進出されなくても、原子力に対するアレルギーをかつての人は持つておられました。教育が分からないものですから、そのアレルギーを取るだけでも意味があるのではないかと私は思います。正確な理解と言いますか、それは高専をご卒業の方は理科系ですからやはり知っていただく必要があると思います。これは私の提言でもあります。ありがとうございます。いよいよ時間が迫ってまいりましたので、委員の方から一言でも結構ですので、何かご提言があればおっしゃっていただきたいと思います。本島さんどうぞ。

(本島委員)

提言かどうかわかりませんが、私はいつも新入社員に面接するとき、ものづくりへの好奇心あるいはやる気、パソコン技術、英語外国語の3つが、基礎学力以外の所で大事だと思っています。今日はいろいろ説明を聞いたら、この3つに各々、かなり努力していただいて

いるようで、ロボコンなどものづくりや好奇心、英語はTOEICを随分努力されている。パソコンについてもカリキュラムにだいが入っていると思うのですが、この3つが基礎学力以外のところでないと、今はなかなか通用しないと思うのです。大学も同じだと思いますが、今は努力されていますが更にと希望したいと思います。それから私の感想ですが、最近景気が比較的良くなって、製造業が少しUターンをしてきているのではないかと。一時は、日本ではほとんどのものづくりがなくなった。それがもう一回戻る可能性が出てきたというのが好況の理由だと思います。そういう意味で高専あるいは大学の理系の方の活躍がこれからものすごく大事です。この後10年ぐらいで日本の将来が決まるのではないかと考えています。そういう意味では高専、大学の理系の方の努力は非常に大事だと思いますので、ぜひ一層頑張っていたいただきたいと思います。それに掛かっているという部分が非常に多いと思います。よろしくお願いたします。

(児嶋委員長)

はい、ありがとうございました。では何か。野村委員さん、何か一言。

(野村委員)

丹南地区はものづくりの町ですので、丹南地区に高専があることはたいへんな財産であると思っています。そういう意味で福井高専が地元産業と積極的にかかわっていただいていますことに、日頃感謝を申し上げている次第です。資料のとおりで丹南の産業、伝統産業、伝統工芸がかなり県内ではここに集積しています。そこでちょっと見せていただきましたら、伝統産業は眼鏡、漆器、和紙、打ち刃物とあるのですが、繊維とか焼き物も伝統産業、伝統工芸に入りますので、これは高専に馴染まないのかも分かりませんが、挙げていただいたらどうかというのがひとつです。もうひとつは独立行政法人になられまして、いろいろな費用の面で我々の財政も厳しいので大きな事は言えませんが、地域と連携協定を結ばれて、どれだけ地域の行政や商工会議所が支援させていただいているのか分かりませんが、我々はどちらかと言うと甘えるほうで、何かあると高専にお願いしますと、産官学とか言いながら、経費はどうなっていると言いますと、経費の面については寂しいような感じがしますので、当初予算を組むときに、地域行政や商工会議所と少し摺り合わせをしても良いのではないかと気がします。

めがねワク waku コンテストが昨年、約1,100件が、地元が頑張りまして2,400件ということで、応募者が増えたことはたいへん嬉しい事ですが、これを一つ一つ審査してもらわなくてはなりません。たいへんな手間だと思います。そういうことと予算のからみも、見直しをしていかなければと思います。これがどんどん、例えば3,000、4,000件になればありがたいことですが、ではそれに伴う予算については別世界になりますと、むしろ高専があるということが地元の産業にもものすごく助かっているという意味で、我々は多少の



鯖江商工会議所
野村一榮会頭

金銭的な支援など、有効な金を出ささせていただいたほうがいいのかなど。だからめがねワク waku コンテストに100万円を出ささせていただいていますが、それが本当に生きるのか、めがねワク waku コンテストは逆に高専の先生方に支援してもらって、その100万円は別の方にお出したほうがいいとか、そういう摺り合わせをこれからさせていただいたほうがいいのかなど。越前市、鯖江市、武生の商工会議所、今立商工会、鯖江商工会議所と地域協定をしていますが、協定という和我々のほうが甘えることが多いだけのことです。高専から逆にこちらのほうに依頼されることがありませんので、ちょっと肩身が狭い思いです。少し遠慮なく言われたほうがいいのかなどという感じがするのですが、どうでしょうか。

(児嶋委員長)

いかがでしょうか。非常にありがたいご提言だと思います。

(駒井校長)

ありがとうございます。行政も、例えば鯖江市長の牧野さんなどは非常に積極的にお話をいただいています。例えばアントレプレナーサポートセンターを卒業した後、起業する場合の空間の提供などに関しては鯖江市で考えてやろうと。その前段階のアントレプレナーの教育をお前の所でやりなさい。実際に飛び立った後の話は鯖江市にお願いをするということで、野村会頭が言われたことに関しても、鯖江市も含めてこちらから積極的にいろいろと働きかけをやり、同じ使わせていただくならお金をより有効に、めがねワク waku コンテストに限らず、もっと広い意味で有効に使わせていただくようにしたいと思います。

(児嶋委員長)

今の件で私も感じる事があるのですが、例えば年に1回、定期的に商工会議所さんと高専さんが協議会を設けられて、今年度はどのような課題に取り組むかを協議されて、たとえばこの部分がもうちょっとならばワーキンググループを作るとか、小委員会を作るとか、何かそんな形をお取りになると積極的な動きができるのではないかと考えています。

(駒井校長)

まだその第2段階まで行っていませんが、年1回の定期的な会合を持っているのです。その趣旨は、圧倒的に高専は敷居が高い、我々はそんな意識は全くないのですが敷居が高いと、それでは一同に会して懇談の場を持つと、それは数年来続けております。次はもう一歩踏み出して、敷居はしょっちゅう行き来させていただいていますので低くなってきたと思いますので、実際に低くなった後、先生がおっしゃるワーキンググループを作って具体的なアクションをやっていく段階に移ると思います。例えば打ち刃物業界との懇談も先般やりました。和紙工業協同組合との交流もやりました。

(児嶋委員長)

そうですか。それはたいへん結構なことと思います。太田先生、どうぞ。

(太田教務主事)

最初におっしゃった伝統産業，確かに全国的に見てもこれほどある所はないのではないかと思います。確かに，伝統産業として和紙，打ち刃物の二つが現在動き出しまして，伝統産業支援，地場産業支援として和紙と打ち刃物をいろいろとやらせていただいているところです。漆器は鯖江商工会議所様のご案内によりまして，ニーズ・シーズ会をまもなくやる所です。それから繊維は昔からの福井の地場産業ですので，そんなご相談もやらせていただきました。他の繊維メーカーさんともいろいろやらせていただいています。環境ばかりではなく，繊維とも取り組んでいこうと思っています。越前町には県の谷口さんが行かれておりますので，この間も私どもの地域連携テクノセンター長が参りまして焼き物に関して，越前町を中に入れて福井テレビの特番もありましたが，新しく科学的にやることも準備中がございます。地域連携の中に越前町が入っていないのですが，まずこれを入れていただこうと思っています。商工会議所さんとの話し合いですが，これは鯖江商工会議所さんはいろいろなシーズ・ニーズ会を通して必ず商工会議所様に入らせていただいて，やらせていただくとか，あるいはめがねワク waku コンテストは眼鏡協会から商工会議所様を通して，鯖江商工会議所様とやらせていただく。あるいは我々のパネルディスカッションにも商工会議所からパネリストになっていただくとか，いろいろ一緒にやらせていただいています。打ち刃物と和紙に関しては武生商工会議所様と一緒にずっとやっているのですが，武生商工会議所様は福井高専と一対一の年に一回の話し合いをやりまして，その後パーティとか交流会もやっております。福井商工会議所様ともそのようにやっております，そういうのを元にやっていこうと思っています。

(児嶋委員長)

たいへん結構だと思います。もう後時間がありませんが，たとえ一言でもご提案をいただければと思いますが，何かございませんでしょうか。こうしたほうがいいとか，あるいはこの点は大丈夫ですかとか。友田委員さん，どうぞ。

(友田委員)

先ほど申し上げましたように目白押しでびっくりするばかりですが，世の中は複雑化して，私どももいろいろな書類も多くなりますし，機構からの指示もあると思いますが，我々自身にも言っているのですが，極力複雑なことをシンプル化して，絞り込んでやっていただけたら皆も少しは助かるかと思っています。もう，たいへん目白押しでびっくりしているのです。教育重視が極めて重要だと思いますので，もちろん目を向けておられるのは分かっていますが，ただ教育重視も見ただけならと思います。一丸となって隅々の先生方のお声も聴いていただいて，一丸となっていらっしゃるのですが，我々のころはいろいろな意見が出てきてなかなかまとまらない。一方向に向いているように見えても，なかなかいろいろな意見がありますので，教育重視の意味で，ポンと見えやすい形も必要なのかなど。例えば簡単に言うと「ロボット工学科」を作りますと言ったほうが，意外と1.6倍が1.8倍になったりするかもしれません。また非常に微に入り細に入り対応，検討されていますので，総合的には申し上げる事はございません。

(児嶋委員長)

ありがとうございました。だいたい時間になりましたので、私からまとめの時間が来たと思います。よろしいでしょうか。みなさんのたいへん熱心なご質問もありまして、全体としては委員の皆さんは福井高専の皆さんが大変一生懸命に頑張っている。教育、研究、社会貢献、いずれにしても最高のレベルで頑張っているという点については異論が無いのではないかと思います。そしてまた学生さんの受入れについても非常に積極



評議員会の模様

的に中学校に出向いて、あるいは中学校の先生方とも連携を取りながら非常にしっかりやっています。受け入れた以上、混合学級で非常に特異な幅広い人間関係を作ってください、そしてメンタルなヘルスにも十分な配慮をしていただいています。やがて専攻科では20人に対してたえず26人以上の、定員を超える希望者があって、しかも就職ならびに大学進学をしておられる。教育について私どもはほとんど文句の言いようがないと関心するばかりです。

研究も、科研費も金額が減ったようですが採択数が増え、若い人も採択が始まったということで、先に希望があると思っています。いろいろな意味で高い水準を維持しておられる。そしてまた産学官連携についても非常に大きく取り組んでおられます。また福井大学、福井工業大学様と一緒にいろいろなプロジェクトにも参加していただいています。その成果が地域産業の振興に貢献しておられることも、他の高専さんと比べて遜色の無い、あるいはそれ以上の成果を上げておられると思います。これは委員の皆さんが恐らく同じ感想だろうと思います。

これからいろいろな方向性ですが、法人化されて全国的な組織に組み込まれましたので、全国的な方向に従わざるを得ないという厳しさがあるようですが、本科の定員削減と専攻科のできれば充実という方向は避けて通れない方向だと思いますが、その時にいかに特色を出していくか。福井高専にしかないものを作ってください方向で考えていただければと思います。どこの高専とも同じであるというのはちょっと具合が悪いと思います。出来る限り特色が出るような方向を模索していただければと思います。いろいろな意味でJABEEにつきましても非常に真剣に取り組んでおられますし、教育、研究、社会貢献、どこも言う所がないと思います。あまり褒め過ぎるとまた具合悪いかもかもしれませんが、ここが具合悪いという所がほとんどないという感じがするのですが、いかがでしょうか。しかし、どうかこのまま、先生方、評価疲れという、大学もそうですが、例えば自己点検評価でもこれほど充実した冊子を作られるのはたいへんだったと思いますが、それについてもきちんと取り組んでおられて、認定評価はすでに受けられて、また暫定評価もこれだけあれば容易にパスできるのではないかと思います。これからも益々ご努力をいただきまして、福井高専の地位を高めていただきたいと思います。先生方の日頃のご努力に心からの敬意を表したいと思います。ご苦勞

様です。頑張ってください。

それでは一応、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(司会)

最後に本校の駒井校長からお礼を申し上げます。

(駒井校長)

本日は長時間にわたりましてご提言を賜り、ありがとうございました。本日頂戴いたしましたご意見を参考にいたしまして、ご期待に沿える福井高専にするよう努力してまいります。本日はまことにありがとうございました。

VII. 参 考 資 料

平成18年度第1回
福井工業高等専門学校評議員会
平成19年2月2日

本校の置かれている立場



前年度評議員会(平成18年3月)以降の推移

- ✓ 国立高専機構河野伊一郎理事長: 国立高専の整備について(平成18年9月)、現代の高等教育(平成19年1月号)「個性ある高専」の再生をめざして
量より質の向上＝再編統合と連携
国立高専間ならびに学科間の再編統合
専攻科の充実と地域連携
- ✓ 同一県内に複数設置されている16高専で検討開始
- ✓ 本校としても近隣高専との再編統合、あるいは学科再編を行い第2期中期計画期間中に新教育課程を開始するかどうかを決定しなければならない時期になっている



本校の選択肢

- ✓ 第2期中期計画(平成21年度から平成25年度)
- ✓ 第2期中期計画に何も盛り込まない。(何もしなければ統合された高専からの大きな格差が生じる。)
- ✓ 近隣高専との再編統合を推進する。(地域を巻き込んだ大問題になる。)
- ✓ 学科再編を行い、本科定員を削減して専攻科を拡充する計画を盛り込む。(自助努力で出来る選択肢。)
- ✓ その他



福井高専の置かれている立場

- ✓ 少子化のなかでの入学志願者の確保: 平成16年度＝1.6倍、平成17年度＝1.8倍、平成18年度＝1.7倍、平成19年度入試では入試会場を広域化し、諸施策を講じたが、倍率低下に歯止めはかからず。(＝たかだか1.5倍)
- ✓ 人件費削減への対応: 平成18年度より5年間で人件費を5%削減しなければならない。
- ✓ 時代の要求に応じた学科内容の見直しと専攻科の拡充



要求事項を満たす解

- ✓ 上述の要求事項を全て満足できる解の一つは学科再編を行い、本科定員を削減して、専攻科を拡充することである。
- ✓ 考えの基本は、社会の要求と社会への説明責任。
- ✓ 議論が早急にまとまれば、第2期中期計画に学科再編と専攻科拡充を盛り込みたい。
- ✓ そのための組織改組を行い、議論を始めた。



本校の概要説明



教務関係



福井工業高等専門学校の使命

1. 創造性豊かな人材の育成
2. 幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力の育成を目指す実践教育を行う
3. 高度に情報化した国際社会に対応する教育を行う
4. 環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育を行う
5. 地域と連携した産官学共同研究の推進を図る



学習・教育目標

福井高専の学習・教育目標



学習教育目標

- A. 倫理・ものづくり
- B. 工学・専門技術
- C. 創造・デザイン
- D. コミュニケーション
- E. 実践・協理的思考

福井高専

- ・ 協賛校学習教育目標
- ・ 福井高専

学習・教育目標

- A. 地球的視点の技術者倫理を意図した、ものづくり・環境づくり、システムデザイン能力の育成
- B. 幅広い工学的素養、得意とする専門技術の基礎能力および応用能力の育成
- C. 豊かな創造力とデザインマインドを持ち、常に自己を啓発し、新しい課題・分野に挑戦する能力の育成
- D. 高度に情報化した国際社会で必要なコミュニケーション基礎能力とプレゼンテーション能力の育成
- E. 体験に基づいて問題を発見し、解決策を企画・実行する実践的能力および論理的思考能力の総合的な育成

この学習・教育目標は、2004年度 JABEE 評価のために、JABEE認定基準2004年度版に基づき、「全ての専攻科生が修了時に達成できる目標」(Outcomes)を設定しています。



シラバス

科目名	授業科目	授業内容
科目名: 応用物理学 科目id: 02101 [Applied physics]		
必修 2年 専攻科共通 履修単位数: 2単位 講義 授業科目/人数 必修		
【授業科目】応用物理、応用物理(2)科目を履修した上で履修する。【授業科目】応用物理(2)科目を履修した上で履修する。		
【授業】「履修」の科目を履修した上で履修する。【授業】「履修」の科目を履修した上で履修する。		
第1講	物理学概論	物理学の発展、物理学の応用、物理学の歴史、物理学の未来、物理学の教育
第2講	力学概論	力学の発展、力学の応用、力学の歴史、力学の未来、力学の教育
第3講	電磁気概論	電磁気学の発展、電磁気学の応用、電磁気学の歴史、電磁気学の未来、電磁気学の教育
第4講	波動概論	波動学の発展、波動学の応用、波動学の歴史、波動学の未来、波動学の教育
第5講	量子力学概論	量子力学の発展、量子力学の応用、量子力学の歴史、量子力学の未来、量子力学の教育
第6講	原子核物理学概論	原子核物理学の発展、原子核物理学の応用、原子核物理学の歴史、原子核物理学の未来、原子核物理学の教育
第7講	宇宙物理学概論	宇宙物理学の発展、宇宙物理学の応用、宇宙物理学の歴史、宇宙物理学の未来、宇宙物理学の教育
第8講	天文学概論	天文学の発展、天文学の応用、天文学の歴史、天文学の未来、天文学の教育
第9講	地球物理学概論	地球物理学の発展、地球物理学の応用、地球物理学の歴史、地球物理学の未来、地球物理学の教育
第10講	環境物理学概論	環境物理学の発展、環境物理学の応用、環境物理学の歴史、環境物理学の未来、環境物理学の教育



学生の受け入れ



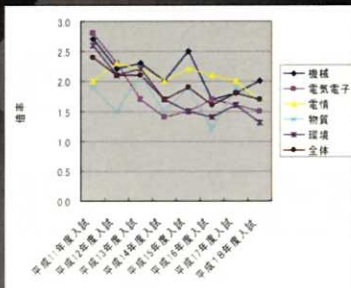
アーリーサマーオープンカレッジ



オープンカレッジ



学力試験倍率



工学基礎コースの設置



低学年における獨創性・創造性を育む教育
(ものづくり科学、3単位)の導入



日本技術者教育認定機構 (JABEE) 受審認定



2006年11月12日、13日に中間実地審査

正式決定は2007年5月ではあるが、
実地審査の段階では前回受審時
における全ての指摘事項をクリアし、
残り3年の認定がなされる予定である。



平成17年度機関別認証評価の受審

評価の結果、福井工業高等専門学校は、大学評価・学位授与機構が定める高等専門学校評価基準を満たしていると判断する。

特に優れた点

- 転科が可能な工学基礎コースの設置
- 全学科共通の専門科目である「ものづくり科学」
- 4年次の「校外実習」、専攻科課程の「インターンシップ」の実施
- 卒業(修了)生は例年極めて高い就職率、就職先の関係者からも高い評価が得られている。
- 公開授業は授業改善の取組として有効。



地域に対する支援

1 地域連携協定の締結(平成17年5月)



現代GP

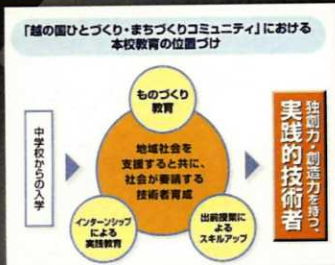
Good Practice



現代GP (Good Practice)は、平成16年度に文部科学省が創設した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の略称です。平成17年度は、全国で509件の申請があり、84件が採択されました。



福井高専と地域連携



3. ふくい産業支援センター・福井県鉄工業協同組合連合会との連携

中小企業支援に関する包括的連携 平成18年7月



4. 高専等を活用した 中小企業人材育成支援事業

人材育成講座
アトムコース(原子力発電、放射線関連講座)
マシンコース(機械工学基礎講座)
計40名

創造性ある開発型の技術者育成



5. 起業家の育成

本校が起業家のために「アントレプレナーサポートセンター」
を平成19年4月に開設。

起業による地域産業界の活性化を図る



国際社会に対応する教育

オーストラリアのパララット大学との
相互友好協定による交換留学制度



平成18年5月 パララット大学にて

学生関係



学生と担任制度

- ✓ 学生生活全般の指導(友人関係、生活行動の把握(欠課、欠席の点検)、各種届け出指導等)
- ✓ 学業成績、悩み等についての個別指導
- ✓ 特別活動の企画・実施(1~3年)
- ✓ 学校行事の指導・企画・引率
オリエンテーション(1年)、遠足(1~5年)、校外研修(2年)、工場見学旅行(3年)、校外実習(4年)、卒業研究発表会(5年)
- ✓ 進路(就職と進学)指導(5年)
- ✓ 保護者懇談会の実施(1~5年)



中期計画の中の担任制度

- ✓ 担任・副担任制度の継続
→ 学生に対するきめ細やかな対応(特に低学年)
校門指導等の強化(H16年度開始)
- ✓ 学年主任制度の導入
→ 進路指導の強化; 高学年(H16年度開始)
→ 混合学級への対応; 低学年(H17年度開始)



学校行事①: 様々な体験活動の継続

- ✓ 新入生オリエンテーションキャンプ(1年)
- ✓ 遠足(1~5年)、校外研修(2年)、工場見学旅行(3年)、校外実習(4年)、卒業研究発表会(5年)



豊かな自然の中で行う新入生オリエンテーション



学校行事②: 学生会活動の奨励

- ✓ 体育祭(5月)
- ✓ 弁論大会(10月)
- ✓ 高専祭(10月)



課外活動①: クラブ活動の奨励

- ✓ のびのびしたクラブ活動(受験戦争なし)
- ・ クラブ数: 体育系22サークル、文化系23サークル
- ・ 学生加入数: 約700名、顧問教員数: 53名
- ・ H18年度北陸地区高専体育大会
優勝(団体): 卓球、バレーボール(女子)
- ・ H18年度全国高専体育大会: 水泳優勝(個人)
- 体育系部: 陸上、水泳、野球、サッカー、ラグビー、バレーボール、バスケットボール、テニス、バドミントン、ソフトテニス、卓球、ハンドボール、剣道、柔道、ソフトボール、空手、少林寺拳法、合気道
- 文化系部: プラスバンド、モダンミュージック、写真、囲碁・将棋、英語、エレクトロメーキング



課外活動②：コンテストの奨励と支援

- ✓ ものづくり関連コンテストの奨励
- ロボコン（ベスト4）、プロコン（敢闘賞）、デザコン（佳作）、Robo-ONE、ふくいソフトコンペ等



高専ロボコン「ふるさと自慢特急便」では、地域特産物として【越前めがねガニ】を確実に運びベスト4と大健闘！



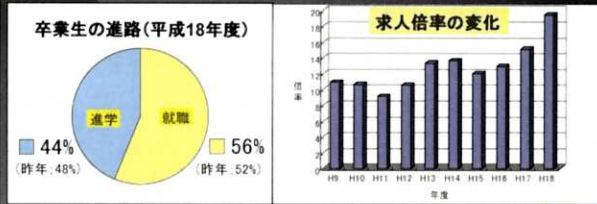
課外活動③：夢づくり工房プロジェクト

- ✓ 夢づくり工房（ドリームラボ）（H17-18年度）
：ものづくり多目的スペースを工場内に新設
ロボコン、Robo-ONE（2足歩行ロボット）、
知能機械演習、実験、卒研等
- ✓ ロボコン用ホームページ
の開設（H16年10月）
：過去の戦歴、
ロボットのデモ活動、
3Dアニメーション、
QTVR等



卒業生の進路：3年目の進路指導委員会

- ✓ 高い求人倍率（平成18年度：19倍）により就職者がやや増加



中期計画：安全管理の強化

- ✓ クラブ活動の安全管理を主とした指導マニュアルの作成（H16年4月）
- ✓ 課外活動危険箇所調査と安全面を重視した環境の整備
H17年 AED（自動体外式除細動器）設置
野球フェンス改修等
- ✓ クラブ活動の安全管理に関する講習
 - ① H16年7月：
「クラブ活動における安全管理を中心とした指導について」
 - ② H17年7月, 18年7月：
「AEDを用いた救急救命法実習」



AED実習風景



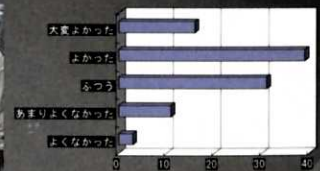
中期計画：メンタルヘルス関連

- ✓ 学生指導担当職員研究会の開催
 - H16年7月：「学生の心理的問題に対する指導援助の方法」
 - H17年7月：「高専生のメンタルヘルス」
 - H18年7月：「青年期理解と対応」
- ✓ メンタルヘルス関連アンケートの実施
 - H16年より毎年実施：学生相談関連アンケート（全学生）
 - H19年1月：いじめに関するアンケート（1～3年）
- ✓ 報告書の作成
 - H16年度開始：学生指導担当職員研究会・ボランティア活動報告書の発行



中期計画：ボランティア関連

- ✓ ボランティア活動の奨励
 - H18年10月：第3回クリーン大作戦（150名）



よかった理由：心がきれいになった、地域の人とふれあえたこと



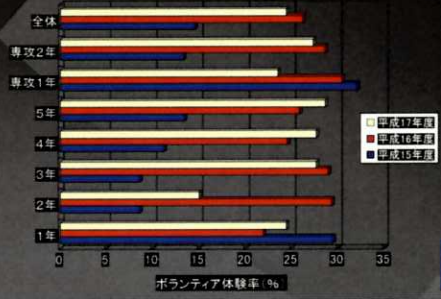
サイエンス夢ボランティア

- ✓ 福井県のボランティア体験事業に参加（H16年度より）
 - ものづくり関連でロボットのデモ・操縦体験、
 - 環境づくり関連で環境学習ボランティア事業を展開



ボランティア体験率の増加

【福井豪雨(平成16年度)の年の体験率をほぼ維持】



寮務関係



福井高専学寮

学寮は「青武寮」と称し、南寮・北寮・東寮の3棟からなり、東寮には女子寮が併設されている。定員は240名である。

遠隔地からの入学生に修学の便を与えると同時に、共同生活を通してお互いに敬愛啓発し、人間形成を図るという目的で設置されていて、**全教員が交替で寮監として泊り、寮生との触れ合いを大切にする教育寮**として位置付けられている。



管理運営組織

寮務主事

- ・学寮運営委員会(10名)
- ・寮務主事団(8名)
- ・学生課寮務係(2名)
- ・寮監(平日2名)
- ・寮生会(10名)



創設期の学寮

昭和41年南寮(90名)創設



学校全景 昭和44年



学寮の施設 — 1 —

南寮・・・平成8年新設(75名全室個室)



各階トイレ・洗濯室
補食談話室(キッチン・
冷蔵庫・TV等)

留学生(18年度6名)用
シャワールーム
ウォシュレットトイレ
交流室(空調完備)



学寮の施設 — 2 —

北寮・・・昭和42年建設→平成6年改修(75名一部2人部屋)
東寮・・・昭和45年建設→平成5年改修(90名全室個室)



北寮



東寮(3・4階女子寮:46名)



学寮の施設—3—

付属施設

《管理事務室・寮監室・食堂・浴室・寮生会室等》



食堂(空調完備)



男子浴室(女子用も)



学寮の施設—4—



図書室



スポーツ施設



パソコン設置
(インターネット可)



学寮運営の課題

安全性の充実

- ・部外者対策
- ・衛生管理の徹底
- ・女子寮生の安全確保

女子学生の増加

- ・女子寮生の受入れ《女子棟改修》

より充実した寮生活を！ → 寮生指導の改善



学寮運営の改善

- ①安全性の充実
- ②寮生・教職員の協力体制の充実
- ③より緻密な寮生指導
- ④女子棟の改修



①安全性の充実

防犯カメラの設置 (平成18年7月)

各棟玄関及び東寮非常階段出入口

カード鍵の導入 (平成18年9月)

女子共通部分

食事時間の厳守 手洗い励行 (消毒:感染症対策)



防犯カメラ



②寮生・教職員の協力体制の充実



- ・寮生との意見交換会の開催(6月・11月)
- ・寮生活アンケート (11月)
- ・寮監マニュアル(寮生指導規範)の整備



③より緻密な寮生指導

- 寮生保護者との懇談会・個別面談（7月）
- 留学生との懇談会（12月 学生課主催）
- 文化的な行事
 - 文化講演会（12月）
 - テーブルマナー講習会（1月）

文化的活動

寮生会文集「日野」
昭和52年度から毎年発行

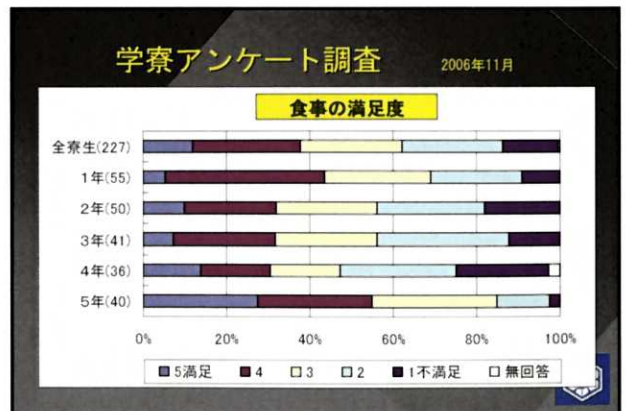
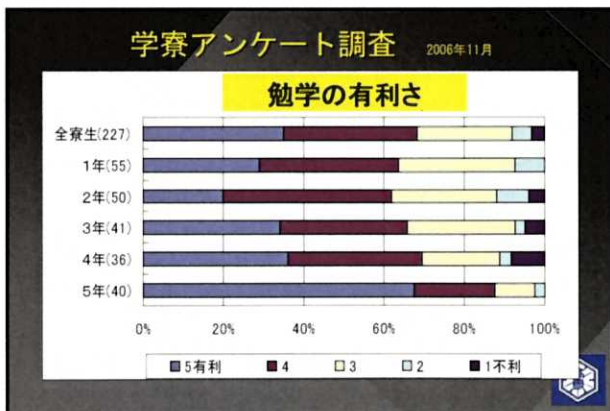
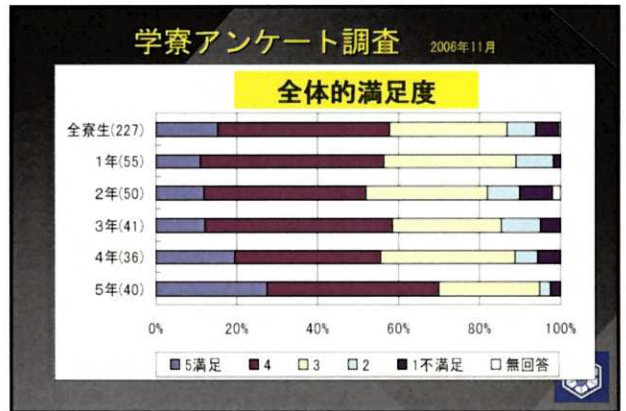
記録日誌

- 寮監日誌(東寮・北寮)
- 検食日誌(教員用・学生用)
- 週番日誌(点呼当番)

④女子寮の改修

平成18年4月

4F	補食室	女子(23名)	非常階段
3F	補食室	女子(23名)	
2F	補食室	男子(18名) 女子(5名)	非常階段
1F	寮監	男子(21名)	



学寮の指導原則

快適な寮とは、寮生互いの信頼と規律の上にある。

いじめ・暴力・盗み

のない学寮の運営に、教職員一同全力を尽くしております。



専攻科



専攻科制度

本科の上に2年間の教育課程
大学評価・学位授与機構の審査により**学士号**取得

定員（1学年）

生産システム工学専攻（12名）
環境システム工学専攻（8名） 計20名

修了要件

62単位以上の修得
「環境生産システム工学」の学習教育目標をすべて達成



学生数

在籍者数

1年生：26名 2年生：26名 計52名

修了者数

H16：29名（JABEE修了：20名）
H17：26名（JABEE修了：26名）

志願者数

H16：34名 H17：35名 H18：38名



就職・進学

求人倍率：27倍

就職先（県内就職：8名）

KBセーレン、福井市役所、倉茂電工、京セラ 等

進学先

東京工業大学大学院、金沢大学大学院、
岐阜大学大学院、大阪市立大学大学院 等



アドミッションポリシーの改訂

- 得意とする工学分野の**基礎能力**を身に付けている人
- 何事にも**自主的・能動的**に臨む姿勢を持つ人
- ものづくり・環境づくりに意欲のある人
- 多様なシステムを理解し、**創造的にデザインする能力**を身に付けたい人
- 国際社会で活躍できる**実践的技術者**を目指す人
- 学士（工学）の学位**を取得したい人



技術者教育

「環境生産システム工学」の教育プログラム
(JABEE認定プログラム)

約1ヶ月のインターンシップ（伝統産業、地場産業企業）
海外インターンシップ（7/12～8/19）
（カリフォルニア大学リバーサイド校）

9科目で各2～3回の授業の非常勤講師
(技術士、弁理士、NPO理事長、OBの起業家等)

北陸技術交流テクノフェアの参加

日本原子力発電（株）敦賀発電所見学



特別研究の成果

丹南産業フェアで技術シーズ発表会（サンドーム福井）
（共催：鯖江商工会議所）

優秀発表学生表彰

1. 鯖江商工会議所会頭賞
2. 武生商工会議所会頭賞
3. 福井工業高等専門学校校長賞



教育研究協定

福井大学大学院
ファイバーアミニティ工学専攻と学術協定締結（H18.2）
専攻長はじめ7名の教員による
説明会および意見交換会（H18.12）

早稲田大学大学院と推薦入学の覚書を締結（H18.9）



専攻科と本科の連携

総合試験（数学、物理等）の本科生の受験

TOEIC-IPテスト（年5回）の本科生の受験

TOEICスコア400点以上で入学試験（学力試験）
英語試験を免除



厚生・補導・課外活動

TOEIC高得点者を表彰

専攻科2年生 技術士1次試験3部門で合格
（建設・環境・上下水道部門）

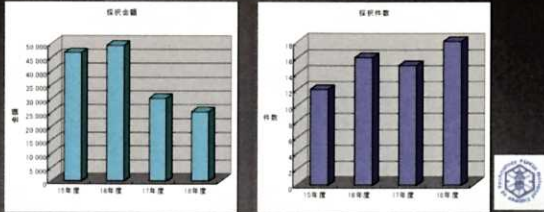
たんなん夢レディオ 仁愛大学の学生とコラボ番組
（コミュニティーFMラジオ局）

専攻科生との懇談会（年2回）

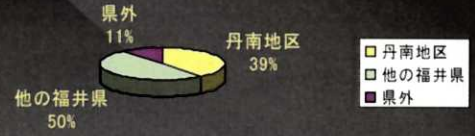


平成17年度第1回評議員会以後の
教育・研究改善事項

1. 科学研究費が全国高専でトップクラスを維持している理由を伺いたい。

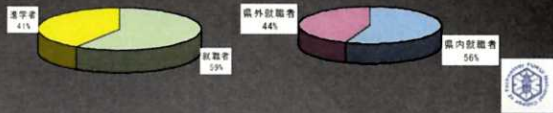


2. 福井高専が位置する丹南地区からの学生が4割近く在籍する、非常に地域に密着した学校である。



3. 中学からの入学希望者には2つの傾向、1) 全日制高校に入りたいが、そのための受験のトレーニングと考える生徒、2) 将来を見定めてきちんとした信念を持って受験する生徒がある。

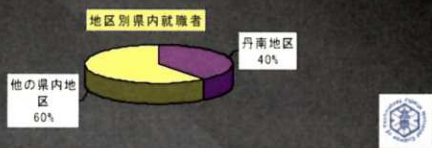
4. 前者の受験生は、大学へのバイパスとして高専を受けている傾向があり、そのため、高専はキャリア教育をきちんと教育課程の中に取り入れる必要がある。一方、後者の受験生は推薦制の生徒に多い。



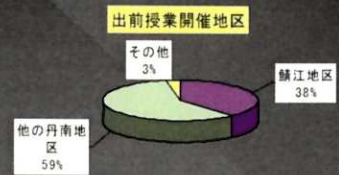
5. 工学基礎コースは中学にとっても非常に有り難い制度である。

	機械工学科	電気電子工学科	電子情報工学科	物質工学科	環境都市工学科	計
学生数	40 (3)	40 (3)	40 (9)	39 (15)	40 (8)	199 (30)
転出希望者	3 (0)	3 (0)	3 (1)	2 (1)	4 (0)	15 (2)
転入希望者	1 (0)	3 (1)	7 (0)	4 (1)	0 (0)	15 (2)

6. 地元の鯖江市、越前市、商工会議所等と地域連携協定を締結し、伝統産業・地場産業支援を積極的に展開されていることにお礼を申し上げたい。しかし、丹南地域を中心とする地場産業への就職者が非常に少ないのは寂しい。次世代を担う若者が地元に対する関心が薄いのは寂しい限りであり、地元に着用するよう指導いただきたい。



7. 「さばえめがねWakuコンテスト」全体では1000件近くの応募があったのに、地元鯖江からの応募はゼロに等しいのは何故か。地元鯖江の地場産業であるめがねに対する関心が低いのは問題である。出前授業も越前市に偏っており、鯖江市は鯖江中学1校だけである。



福井工業高等専門学校中期計画

平成17年度 末



教育理念

- ・創造性豊かな人材の育成を目指す人間教育
- ・幅広い工学的素養、基礎能力及び応用能力を目指す実践教育
- ・高度に情報化した国際社会に対応する教育
- ・環境を意識し、地域社会に根ざしたものづくり教育



養成すべき人材像

地球的視点の倫理観を持ち、「ものづくり」と「環境づくり」に関する能力と、多様な「システム」を理解し創造的に「デザイン」する能力を身に付けた、国際社会で活躍する実践的技術者を育成する



業務運営の効率化に関する目標を達するために取るべき措置

- (1) 毎事業年度につき1%の業務の効率化を図る
節約額については1%の業務効率を図った
- (2) 地域の公共機関等へ情報提供を図り、学校財産を積極的に地域活動等に使用に供与。
「先進教育研究センター」を「地域連携テクノセンター」に名称を改めた。
- (3) 人員配置の見直しにより経費の抑制を図る。
- (4) 科学研究費補助金の申請を義務化。
- (5) 先進技術教育研究センターを中心に、共同研究、受託研究などの外部研究資金の増加を図る。
科学研究費補助金を獲得するため、学内説明会を開催。
地域連携テクノセンターでは「JOINTフォーラム」「共同研究発表会」「各業界とのコース・コース交流会」等を開催し、寄附金、民間等との共同研究、受託研究などの外部研究資金の獲得を図った。



入学者の確保

- ① 中学校、高等学校への広報活動を更に充実させるとともに、ホームページを充実させる。
ホームページに掲載する入試に関する開示情報の再検討を開始
- ② 出前講義、公開講座、オープンカレッジの実施により、本校への理解を深める。
実施中
- ③ 推薦による選抜は、高専の学生にふさわしい、明確な目的意識を持つ人物の応募を期待するための制度であり今後も継続実施する。
継続して実施中。今後、制度の改善を図る。
- ④ 入学時に希望学科を決められない中学生の受け皿として「工学基礎コース」を設置する。
平成17年度より「工学基礎コース」を設置した。
- ⑤ 専攻科の入学選抜は、推薦・学力選抜試験、さらに社団法人特別選抜試験を実施し、定員の倍を超える志願者を目指す。
平成17、18年度の入学倍率はともに1.3倍であるが、専攻科委員を中心に、本科の高学年を対象として専攻科の魅力・特徴を説明し、志願者増を図った。



(2) 教育課程の編成等 (1)

- ① 電気工学科では電気に関する幅広い分野であることを的確に表現するため「電気工学科」を「電気電子工学科」に名称変更する。
平成17年度4月1日に「電気工学科」を「電気電子工学科」に名称変更した。
- ② 創造性教育充実のため、
「機械工学科」では、「科学基礎」の科目により総合デザイン力を養う。
「電気工学科」では、平成17年度より3年に「電子創造工学」を新設する。
平成17年度より3学年に新設した「電子創造工学」において、機械工学科との担当教員の相互乗り入れを行い、内容の充実を図っている。
「電子情報工学科」では、ロボコン、プログラムコンテストへの参加を指導する。
「物質工学科」では、情報ソフト技術を備えた化学技術者を育成するための教育課程に改訂する。
平成17年度で情報系科目の充実に対して教育課程と併せて情報専門教員によって実施した。
「環境都市工学科」では、測量コンテスト、ブリッジコンテストを続ける。



(2) 教育課程の編成等 (2)

【本科共通】

テクニカルコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を育成する。

卒業研究発表会でのプレゼンテーション能力の育成のために中間発表を2度実施した。さらにプレゼンテーション力を正しく評価するために可能な限り1人1テーマとなるように指導した結果、良い発表ができた。

【専攻科】

デザインマインドを育成するために創造デザイン演習を課し、特別研究とは異なるテーマでのものづくりを実施する。

デザインマインドを育成するために創造デザイン演習を課し、特別研究とは異なるテーマでのものづくりを実施した。



(2) 教育課程の編成等 (3)

①新入生の数学・英語の一斉学力試験を実施する。

平成17年度4月に英語、数学について新入生対象に一斉テストを実施した。

②本科の4年・5年次にTOEIC模擬試験を実施する。

③専攻科においてはTOEIC400点獲得を義務付け、高得点を保有した者を表彰する。

TOEIC指導を行うとともに、TOEIC405点獲得を義務付け、高得点を獲得した学生を表彰した。

④全学生による授業評価・学校評価、卒業生アンケート調査続ける。

授業評価・学校評価・卒業生アンケートを実施し、今後の資料としている。

⑤全教員から授業達成度評価の調査を行う。

⑥ロボットコンテスト、プログラムコンテスト、全国高等専門学校体育大会等に積極的に参加し、支援体制の充実を図る。

ロボコンの作業スペースとして夢づくり工房を新設した。教育研究奨励金の増額を実施した。

⑦ボランティア活動に対する意識向上を図る。



(3) 優れた教員の確保 (1)

①本校以外の機関に勤務実績、海外で研究や経済協力で従事した経験のある者を公募する。

助教採用については公立の高校に勤務し高度な知識を有する者を、講師以下については大学での勤務経験を有する者や博士の学位取得又は取得見込みの者を採用した。

②外国人及び女性の教員採用を促進する。

③企業及び大学等と人事交流のできるシステムを検討する。

④技術科学大学連携大学院のサテライトを実現し、客員教授としての教員の人事交流を推進する。

2005年度に長岡技術科学大学連携大学院に本校卒業生が社会人入学した。そのサポートとして、担当教員を客員教授として派遣し、また長岡技術科学大学の教員が本校の客員教授となり、その学生の指導に当たった。

⑤教員に技術士の資格を取得するための支援体制を構築する。

平成18年度、技術士を有する教員の採用を決定した。今後も技術士を取得させるための指導を継続する。



(3) 優れた教員の確保 (2)

①専門科目では博士の学位取得者、又は技術士等を公募する。

②教員の能力向上のため、FD委員会を中心に教員研修や研究会を計画的に実施する。

③専門教育を英語でレクチャーできる「科学英語」の教授者の育成を図る。

④SPP(サイエンス・パートナーシップ・プログラム)等の制度を活用して高校・中学の教員研修に教育委員会と協力して取り組む。また、中学・高校の教育支援の要請(SPP講師依頼等)に応える。

平成17年度にSPPの制度を活用して高校・中学の教員研修に取り組んだ。



(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム (1)

①一般科目教室

a) 人文・社会系科目では、総合的な国語力を身につけさせる。外国語によるコミュニケーション能力の養成を図る。

b) 理数系科目では、自然現象の基本的法則や概念を理解させ、思考力・表現力・創造力の育成を図る。

c) 体育では、身体・健康に関する知識の修得や、身体運動実践能力の獲得を目指した教育をする。



(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム (2)

【機械工学科】

総合科目や実技科目を重視し、ものづくりのセンスと実践力を有すること。

【電気工学科】

幅広い分野の知識を統合することにより、創造的な解決法を提案できること。

【電子情報工学科】

ソフトウェアシステム及びハードウェアシステムの設計、開発及び実現化の能力を有すること。

【物質工学科】

バイオ・材料技術に関する能力と、問題点を提起し解決できる能力を有すること。

【環境都市工学科】

社会基盤をデザインする能力を有すること。卒業時に技術士一次試験の専門知識を理解していること。



(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム(3)

【生産システム工学専攻】

3つの専門の本科教育課程で修得した基礎学力を基盤として、様々なシステムの開発研究を行うことができる柔軟な思考力を兼ね備えた能力を有すること。

【環境システム工学専攻】

生物化学、構造や材料、環境分析、衛生工学や環境水工学、都市や防災システム工学及び環境土木分野に関する知識を有し、機能性新素材や医薬品の開発研究、並びに都市環境を改善するための知識と技術を習得していること。



(5) 学生支援・生活支援等

(1) メンタルヘルス関連の研修会として、学生指導担当職員研究会を開催する。

(2) 入学科・授業料免除、奨学金制度の周知方法及び審査基準を検討する。

(3) 学生に対してきめ細やかな対応をするため担任制度を継続する。

(4) 学級担任間ネットワークを強化するために学年主任制度等の導入を検討する。

(5) インターンシップ等の校外活動への支援体制の整備を図る。

(6) オフィスアワー制度の定着を図る。

(7) 学生相談室の相談体制及び保健室の充実を図る。

(8) 就職及び進学に関する情報を的確且つ迅速に提供できる体制を確立する。



(6) 教育環境の整備・活用

(1) 本館及び環境都市工学棟、先進技術教育研究センター棟を新しい教育目標に合致した建物とすべく改修を行う。

平成17年度に伝統産業支援室、地場産業支援室を設置。

(2) 教育用電子計算機システムを平成16年度に更新する

(3) 実験・実習設備及び教育用設備の更新、学寮の整備など教育環境の充実を図るべく検討する。

(4) 学校全体のバリアフリー化を計画的に推進する。

(5) 課外活動時の安全管理に関するマニュアルを作成し、安全管理に関し継続して検討する。

平成17年度に安全管理マニュアルを作成した。



2 研究、及び社会との連携

(1) 地域の産業界からの技術相談と地域産業に密着した研究テーマの設定

(2) JOINTフォーラム、高度技術者研修、共同研究発表会、マグネットコンテスト、さばえめがねワクMAKUコンテスを継続して行う。

(3) 教員の研究内容を掲載した広報誌(教員総覧・JOINTなど)を年1回発行する。

(4) 地元商工会議所等との情報交換・懇談会のより一層の推進による地域産業界からの技術相談・共同研究の機会拡大と研究テーマの発掘を行う。

(5) 地場産業の発展に資するための施設改修や設備充実を積極的に推進する。

(6) 共同研究に対応するための研究体制の再構築を行う。

(7) 研究成果の知的財産化と知的財産の活用



3. 国際交流、その他

(1) 海外の科学、文化等に触れるとともに国際的視野を広めるため「福井高職員・学生海外派遣制度」の充実を図る。

平成18年度より、オーストラリア、バララット大学と交換留学制度を発足。

(2) 海外先進教育研究実践プログラムによる教員の海外派遣を推進するとともに海外教育機関との提携について検討する。

(3) 鯖江市国際交流協会の協力で開催している留学生懇談会を充実させる。また、他大学の留学生との交流も充実させる。

(4) 留学生に対してチューター制度、補講体制及び設備・図書等の充実を図る。

(5) 教員の教育、研究、校務分掌や学生指導等を反映させた公正で透明性の高い人事評価システムを検討する。

